

## ダンマパダと教育(五)

古 田 榮 作

### 要 旨

前稿を受けて、『ダンマパダ』を“Legends of Buddhist”に拠りながら考察した。本稿では、中村元氏の著作から東洋の文化とその思维方法を概観し、日本における読誦經典が依然として漢訳經典に拠っていることの呪術性を看過することができず、明治以降の西洋社会との交流で生まれた、インドでの經典に依拠すべきである。

『スッタニパータ』(P[S]uttanipata 『ブッダのことば』)『ウダーナヴァルガ』(P[S]Udanavarga 『感興のことば』)は、『ダンマパダ』とともに小部に含まれる最古層の仏説に含まれるが、漢訳はなされず、『ダンマパダ』とは異なっている。

本稿では、『ダンマパダ』の「地獄の章」に関連の深いデーヴァダッタ、アジャータシャトルに関連のある若干の偈頌を取り上げ、アジャータシャトルとの関連で、『觀無量壽經』『阿彌陀經』に言及し、またアジャータシャトルの心的苦悩を現わす「阿闍世コンプレックス」にも言及した。結語として南伝經典の長部經典の「シンガーラへの教え」の家庭教育、夫婦の誓約に、自立と、家庭の存続を位置づけた。

キーワード…ダンマパダ デーヴァダッタ アジャータシャトル 阿闍世コンプレックス シンガーラへの教え

(1)

インド仏教史は、通常、

① 釈尊在世（前四六三～前三八三）のころ、  
および弟子たちによる原始仏教（初期仏教）の時代。

② 前三世紀、アショカ王の命でセイロン（現 スリランカ）に仏教が伝えられる（後のパリー聖典の原型）。

③ 前三世紀末ごろに部派仏教（後に小乗仏教と貶称される）の時代に入る。

④ 小乗仏教に対して、紀元前後ごろに大乘仏教が興り、大小併存の時代が続く。

⑤ 七世紀以降、呪術的世界観やヒンドゥー教と融合して密教が興る。

に区分されている。<sup>(1)</sup>

比較思想という学問領域を開拓した中村元氏は、それぞれの民族の言語表現、外国が文化の摂取した受容形態、外国人がその文化に下した批評、さらにその民族に共通する典籍を選出して考察することを通じて、東洋思想の特色を窮めようとされて、特にインド及び北伝仏教を受け入れた諸民族の思维方法の特色を解明された。<sup>(2)</sup>

インド思想全般に通ずる特色として、普遍の重視、否定的性格、個物および特殊の無視、万物一体観、静止的性格、人格の主體的把握、普遍者への随順、対象的自然界からの疎外、内向的性格——面的・反省的科学の発達、寛容宥和の精神の十二の性質を挙げ、近年の西洋文明への傾斜（経済的近代化）のなかにあっても、バラモンをはじめとして禁欲的戒律を実践しているが、こうしたなかで仏教が誕生し、その平等思想が民衆に支持されたこともあった。<sup>(3)</sup>

他方、仏教を受け入れた大国である中国人の思维方法の特色は、仏教の受容形態に見られるとの限定つきでの考察として、具象的知覚の重視、抽象的思维の未発達、個別性の強調、尚古的保守性、具象的形態に即した複雑多様性の愛好、形式的斉合性、現実主義的傾向、个人中心主義、身分的秩序の重視、自然の本性の尊重、折衷融合的傾向を挙げている。<sup>(4)</sup>

また、韓国人の思维方法として、人間結合の重視、個人崇拜、呪術信仰、気概——意志の強固性、諸思想の対立と宥和、合理的思维、審美感、をあげ、チベット人の思维方法として個人存在の意識——人格的結合の意識の稀薄、人間における絶対者の発見、宗教的靈威ある特定個人に対する絶対的帰投、ラマ崇拜にもとづく社会的秩序に対する絶対的服従、呪術的服従、論理的性格をあげている。<sup>(6)</sup>

これらに対して日本人の思维方法は、与えられた現実の容認、人間的結合組織を重視する傾向、非合理主義的傾向、シャーマニズムを挙げておられる。特に、仏教の受容について考えれば、その経典は現在も漢訳経典が根本経典とされているが、漢訳経典の理解に関しても、①言語上の読解能力の不足のために、漢文の原文を忠実に理解しえなかったり、②漢文の原意を理解することはできなかったり、なんらかの動機にもとづいて曲解している場合があることを指摘されている。<sup>(7)</sup>

日本の仏教の移入摂取を言語の側面から考えるならば、インドに発生した仏教はインド・ゲルマン語族で説かれ、中国に移入されてはシナ・チベット語族に翻訳され、違う語族であるアルタイ語族に属する日本に移入摂取された。しかし、日本では経典の翻訳がなされず、漢訳経典がそのまま日本の経典として活き続けている。

中国語が、孤立語であり、格を欠く（以、於などで補っている）の、孤立語の言語であり、その文法では、①主語が先で述語が後、②動詞が先で目的語が後、③修飾語が先で、それによって修飾される被修飾語が後、という語順が大きな意味をもち（的、着、了という〈虚詞〉によって補われている）、その文字は象形文字を基礎としており、表意的機能を持つものである。中国語の名詞には、複数形がなく、それを補うために量詞（匹、頭、隻など）および諸が用いられている。仏教経典の漢訳に際して、人名・地名は音写され、中国にない概念は「意訳」された。ところが、中国は文字の国である。音写され、「意訳」された文字についての訓詁的な詮索さえなされるのである。また儒教道德の色濃い中にあつて母系社会である南インドの表現は父系社会である中国ではそのまま取り入れられず、父・男を優先させるものとなっている。平等を特色とする仏教が、身分制の枠内で考察され、女子の成仏が「変性男子」としてのみ可能になるとする解釈さえ産み出したのである。さらに、翻訳された原典が破棄され、漢訳の経典のみが残され、膨大な漢訳「大蔵経」が作られたのである。<sup>(8)</sup>

漢訳経典が移入摂取された日本では、それが翻訳されることなく、「経典」そのものが呪術的意味をこめられたものとして受け止められた。

(2)

前稿では『ダンマパダ』の「地獄の章」にある、三つの偈頌 (314、318および319) と「愚かな人」(漢訳経典では「愚闇品」) 版によっては「闇愚品」の章の一つの偈頌について、「Legends of Buddhist」を参照しながら、考察した。

本稿でも、引き続き、「Legends of Buddhist」を参照しつつ、デーヴァダッタ (PDevadatta 提婆、調婆達、調達…天授、天熱 氏名のローマ字表記の後の漢語はその人の漢訳名…以下はその意識名) について考察する。デーヴァダッタは、ゴータマ・シッダールタ (PGotama Siddhartha S Gautama Siddhartha 瞿曇 悉達多 瞿曇 悉達 瞿曇 悉達太子) の従兄弟とされている。中村元氏はスリランカ所伝と『四分律』に依拠してシヤカ族の系譜を明らかにした。それによればシッダールタの父のスッドダナ (PSuddhodana SSuddhodana 浄飯) は四兄弟の中の長兄であり、スッコダナ (PSukkodana SSuklodana 白飯)、ドートダナ (PDhotodana SDronodana 斛飯)、アミトダナ (PAmiṭodana SAmiṭodana 甘露飯) は弟であり、スッドダナの長男であるシッダールタは、異母弟のナンダ (PNSNanda 難陀)、スッコダナの息子のアーナンダ (PSAnanda 阿難、阿難陀…慶喜) およびデーヴァダッタ、ドートダナの息子のマハーナーダ (PMahānāda 摩訶男)、アスルッタ (PAnuruddha SAniruddha 阿那律、阿泥盧豆、阿奴律陀、阿那律陀…樓逗、如意、無滅、善意)、アミトダナの息子のバグ (PBhagu 婆婆) バディヤ (PBhaddiya SBhadrika, Bhadraka 跋提梨迦、婆帝梨迦、跋陀羅…跋多婆、跋提婆提、跋直、跋提、婆提、跋直) という従兄弟の中で最年長であり、アーナンダとデーヴァダッタの兄弟は、シッダールタよりもかなり年少であり、シッダールタの異母弟のナンダと同年齢であると推定して、婿選に際しての武芸競争は、ゴータマの体質(身体虚弱体質)を考慮すれば、行われなかったと見るのが、妥当である、とされている。<sup>(9)</sup>

さらに、デーヴァダッタは教団のあり方に異論を唱えたとしても、彼の主張を支持していた一派が、釈尊の滅後にも永く存続していたことが報告されている。<sup>(10)</sup>

デーヴァダッタの悪行は、アジャータサットゥ (PAjāsattu SAjāsattu 阿闍世 阿闍多設咄路…未生怨、樓閣から突き落とされて指を折った故事から婆羅留支 (Baluruci SBaluruci 折指)) に接近し、彼を唆して、その父王のビンピサーラ (PBimbisāra

〔S〕Bimbisara 頻婆娑羅、頻毗娑羅、瓶沙・影勝）を殺害し、王位を篡奪しようとして、獄舎に幽閉し、餓死させ、刺え、釈尊の暗殺の陰謀をたて、鷲の峯の背後をそぞろ歩きしておられる釈尊に大きな石塊を投げつけて暗殺しようとした。また托鉢中の釈尊に対して発情した象をけしたてて殺害しようとした。

こうした悪人伝説とは別にデーヴァダッタは、教団の戒律として五事を、衆議によって決めようと提案した。その様子を『四部律』は

爾時世尊在王舍城。有因緣衆僧集會。時提婆達多從坐起行舍羅。誰諸長老忍。此五事是法是毘尼是佛所教者便捉籌。時有五百新學無智比丘捉籌。爾時阿難從坐起。以籌多羅僧著一面。作如是言。誰諸長老忍。此五事非法非毘尼非佛教者。以籌多羅僧著一面。是中有六十長老比丘。以籌多羅僧著一面。時提婆達多語諸比丘言。長老。我曹不須佛及衆僧自作羯磨說戒。即往至伽耶山中。爾時提婆達多至伽耶山中。離佛及僧自作羯磨說戒。爾時衆多比丘往世尊所。禮足已却坐一面白世尊<sup>(11)</sup>言。

と伝えている。この中で、デーヴァダッタは、戒律を僧の舍羅（シヤラカー〔S〕śāṭakā〔P〕śāṭakā 籌（くじ））によってきめることを提案し、諸々の長老が同意し、彼の提案する五事を臨席の新學無智なる比丘は投票用の籌を取り始めた時に、アーナンダが立ち上って異議を唱え、この五事は『法でも、ヴィナヤ（〔S〕Pvinana 毘尼、毘尼耶、律）でも佛の教え（〔S〕dharma〔P〕dhamma 教説 法 習慣）でもな」と。デーヴァダッタ伽耶山中に至って自ら羯磨說戒を立てた。つまり、釈尊の説く戒律とは異なる戒律を立て釈尊の教団の分派を立てたのである。デーヴァダッタの唱えた五事は、概ね次のようなものであったとされる。

- ① 『納衣（糞掃衣）を著する〔法〕を受けよ。』
- ② 『乞食法を受けよ。』
- ③ 『一食法を受けよ。』
- ④ 『露地坐法を受けよ。』
- ⑤ 『斷肉法を受けよ。』（肉食を認めない）

『もしも比丘にしてこの五法を受けなば、疾（すみやか）にニルヴァーナを得ん、と。』<sup>(12)</sup>

この五事に対して、釈尊の教団は

- ①『納衣』(糞掃衣) すなわちボロ切れを集めてつくった衣をつけるのもよいが、在俗信徒のくれた衣(『居士衣』)をつけてもよい。
- ②『乞食』によって食物を得るのであるが、また招待を受けて食事する(『請食』)もさしつかえない。
- ③『一日一回食事するのであるが、また二回食事(『再食』)してもかまわない。ただし午前中にかぎる。』
- ④『露地住』すなわち戸外に住むのもよいが、また家の中に住む(『房舍住』)のもさしつかえない。
- ⑤『三種の不浄肉は、これを食してはならないが、それ以外の肉は食べてもかまわない。』<sup>(13)</sup>

こうしたことをふまえて、『ダンマパダ』の偈頌に関連の“Legends of Buddhist”を取り上げていこう。

デーヴァダッタは不相応な衣を着る

Anikkasāvo kāsāvati

yo vatthau paridhessati,

Apeto damasaccena

na so kāsāvam arahati. (9)

Whoever, unstainless, without self control and truthfulness, should don the yellow robe, is not worth of it. (9)

煩惱をもったまま、[六根の]調御と真実から離れて、袈裟衣を着ても、その人に袈裟衣を着る資格なし。<sup>(14)</sup>

Yo ca vantakasāv'assa

sīlesu susanāhito,

Upeṭo damasaccena

ca ve kāsāvamarahati (10)

He who is purged of all stain, is well established in morals and endowed with self control and truthfulness, is indeed worthy of the yellow

robe. (10)

「悟りの力で」煩惱を吐き出し、戒めを身につけて「六根の」調御と真実を具える、その人こそ袈裟衣を着る資格あり。<sup>(15)</sup>

ある日、サーリプッタ (P)Sāriputta (S)Sāriputra 舍利弗、舍利子…智慧第一の佛弟子。なおこの名はサーリ(女性の名)の息子を意味し、母親の名の息子を意味することから母系社会であることが推定される)長老らはラージャガハ (P)Rājagaha (S)Rājagṛha 羅閱祇、王舍城 マガタ国の首都)で法を説いた。この長老の説法にたいへん感動した一人が、サーリプッタ長老やマハーモッガラーナ

(S)Mahāmoggallāna (P)Mahāmaudgalyāyana 目犍連、目健(健)連…葉茯根、采叔氏、讚誦、摩訶目犍連、大目犍連…神通第一の佛弟子)長老をはじめ佛陀の弟子たちを招待することに賛同する町の人々はいへん喜び、各々自分ができる範囲内で食べ物をはじめ比丘生活に必要なものを持ち寄った。その中で一人の布施者がたいへん高価な布施を持参して、「もし、お金が足らなければ、これ売ってその一部にして下さい。しかし、お金が足りたならば、これ売らずに比丘の一人に施して下さい」と言って主催者に手渡したのである。やがて多くの人々からの布施が十分に集まり、そのためにこの高価な布地を誰に施すかについて議論が行われた。その結果、「サーリプッタ長老に」と言う主催者の声よりも「いやサーリプッタ長老様はサーヴァティから来た他所者である。それより地元の人間に施した方がよい」と言う声が大勢を占め、デーヴァダッタという修行者に施すことが決まったのである。

しかし、この善意の布施を受け取ったデーヴァダッタはこれで豪華な袈裟衣を作り、それを身につけては、「俺は偉いんだ！俺をもっと尊敬しろ！もつと俺に布施をしろ」と言わんばかりに傲慢な態度で町を歩くのであった。この様子はラージャガハから来た比丘によって仏陀に報告された。仏陀は「比丘たちよ、愚かな修行者は自分にはない徳を有るかの強く願うものである。比丘たちよ、これが最初のことではない。デーヴァダッタは過去世でもこれと同じようなことをした」と彼の過去世について語りはじめられた。「昔、彼は象を狩るハンターであった。ある日、このハンターは森の象たちが黄色い衣を着た辟支仏 (S)pratyekabuddha (P)paccekabuddha 正自覚者とその教えがまだ現れない時代に師匠もなく独学で悟りを得た修行者をいう。しかし、仏陀のようにその悟りのを世間の人々に悟らせることができなかった。縁覚・独覚ともいう。縁覚の原語ともなっている。因みに声聞の原語は(S)sāvaka (P)sāvakaで教えを聞く修行僧の意で、出家でも在家でも教えを聞く人の意味で、仏弟子を意味した)に出会うと丁重に挨拶をする習性があることを知った。そこで彼は黄色い衣を作り、それを着ては辟支仏になりすまして法衣で弓矢を隠し森の中で象の群れを待った。そして彼の姿を見た象の群れが一頭一頭膝を曲げて丁重に挨拶するのを受けながらデーヴァダッタは、一番最後に挨拶する象を密かに弓矢で殺したのである。比丘たちよ、貪欲などの煩惱をもったまま、六根の調御と眞実 (P)sacca (S)satya 眞理・眞実)から離れて、袈裟衣 (P)kasāya kasāva (S)kāsāya 本来は赤褐色を意味するが、洪・柿洪・洪色・柿色に染めた衣・惡濁などもある。ここでは二つの意味で使われ、貪欲などの煩惱(＝惡濁)がある人は柿色に染めた袈裟衣を着る資格がないという意味である。袈裟衣は比丘に定められた八種の必需品の一つである。上座部仏教では、新入り比丘も大長老も



僧院長も同系色の粗末な法衣を常に着用する。もともとは獵師が用いていたもの(16)を着ても、その人に袈裟衣を着る資格なし」「しかし、悟りの力で煩惱を吐き出し、戒めを身につけて、六根の調御と真実を具える、その人にこそ袈裟衣を着る資格がある」と説かれたのである(16)。因みに比丘たちの八種の必需品(Ṭaṭṭha parikkhara)は、以下のとおりである。

- 1 重衣 (P. saṅghāṭi) 日本僧侶の袈裟に相当する
- 2 上衣 (P. uttarasāṅga) 日本僧侶の衣に相当する
- 3 內衣 (P. antaravāsaka) 足のくるぶしの上まである腰巻
- 4 帶 (P. kāya-bandhana) 內衣がずり落ちないように締める腰帶
- 5 鉢 (P. patta) 托鉢する時に必要
- 6 剃刀 (P. vāṣi) 剃髪用のカミソリ
- 7 針 (P. sūci) 縫い針
- 8 水濾し (P. paṇṣavana) 飲料用の水をこす濾過器<sup>(17)</sup>

漢訳『法句経』では「雙要品」の第九句として

不吐毒態 欲心馳騁 未能自調 不應法衣(毒態を吐かず、欲心馳騁し、未だ自ら調ふること能はずんば、法衣に應はしからず)と表現されている。この句の意味として、「心のけがれを吐いてしまわないで、まだ捨てきれないで、心の奥底にまだわだかまりが残っている。まだほんとうに落ちつくべきものが落ちついていない、そういう心の落ちつきを得ず、したがってまたそのけがれが心の中にある。まだそれを吐ききつてしまわないあいだは、したがって内面的にはまだ非常に悶えている。あそこへ行こうか、ああしようかといった欲望、本능が右に左に目まぐるしく馳走している。……内容ができていずに、中味が熟していないのに、ただ、外側のものをあでやかにしたところでしかたがないではないか、そんな人は袈裟衣を着る資格がないのだ、こういう意味であります」と友松圓諦氏は説く<sup>(18)</sup>。

第十句は、「能吐毒態 戒意安靜 降心已調 此應法衣」と漢訳されており、己の欲望を断ち、意志を安静にするよう戒め、心を調えることのできるものだけが法衣に相応しいとするのであり、両句で「袈裟を纏うから僧侶ではなく、己の心を十分に調御できるから袈



姿を纏うのである」とするのである。ここでも釈尊特有の意味の転換がなされ、本質的な意味の問い直しがなされているというべきである。デーヴァダッタの所行を通じて相応の衣を着るべきであると説くのである。高貴な衣装をまとうことで、自己の人徳は別として、「衣」の象徴する尊敬すべき存在かのように見せ、傲慢な態度を取ろうとする彼には重すぎるものであった。「服装」は、外から個人を「あるべき姿」に強制するものであるが、「あるべき姿」以上に「identity」を確定するために用いられている。学校教育における「制服」の問題も一方では校風を維持し、「自覚」を齎すものとのものであるとすることには、聊か違和感をおぼえざるを得ない。行為、人徳があつてこそ「衣」である。さらに、デーヴァダッタが「教団の戒律」を改革しようとして、「糞掃衣」の着用を要求することはこの二つの句とも関わっていると言わざるをえない。

#### デーヴァダッタの経歴

Idha tappati pecca tappati,

pāpakāri ubhayattha tappati,

Pāpam me katan ti tappati,

bhīṇyo tappati duggaṭṭin gato. (17)

Here he suffers. Hereafter he suffers. In both states the evil-doer suffers. "Evil have I done" (thinking thus), he suffers. Furthermore. He suffers, having gone to a woeful state. (17)

悪いことをする人は、この世で苦しみ、あの世で苦しみ、二つの世において苦しむ。自分は悪いことをしたと苦しみ、悪趣の淵に落ち込み、さらに多く苦しむ。(17)<sup>19)</sup>

仏陀が故郷のカピラヴァットウを訪問された時、釈迦族のパディヤ王子、アヌルッタ王子、アーナンダ王子、バグ王子、キンピラ (P) Kimbila 金毘羅 迦翅彌羅) 王子、そしてシッダルタ王子時代の妻ヤソッタラ (P) Yasodharā (S) Yaśodharā 耶輸陀羅、耶戍陀羅・持称、具称、除称、降称、名聞、持誉) の弟デーヴァダッタ王子も共に出家して佛陀の弟子となった。しかし、デーヴァダッタは同じ釈迦族である佛陀だけでなくの人々から尊敬されていることに嫉妬して、「いつの日か自分が佛陀に代わってサンガ (P) saṅgha (S) saṅgha 僧伽、僧、衆、僧団、教団、和合衆) の指導者になる」と密かに野望をもった。月日が流れ、佛陀がラージガハのヴェルヴァナ (P) Veluvana (S) Venuvana 竹林、竹林園) 僧院 (＝竹林精舎) で説法されていた時、デーヴァダッタが佛陀に近づき、「尊者よ、貴方はすでにお年を召

されている故、私が代わりにサンガの運営をいたしましょう。どうぞ、私にお任せ下さい」と申し出た。しかし、仏陀は「デーヴァダッタよ、私はお前より優れているサーリプッタやマハーモッガラナにさえも弟子たちの指導を任せてはいない」「六年間も唾液を飲み込んでいるお前など問題外である」とその場で断られたのである。これに憤慨した彼は復讐を誓い三度仏陀を殺すことを試みた。一度目はプロの殺し屋を雇い、二度目は大きな岩を落とし、三度目は象を使ったがごとく失敗に終わった。最後に彼はサンガを分裂させる陰謀を計ったが、これもサーリプッタ長老とマハーモッガラナ長老によって阻止され、ついにサンガを去ったのである。

月日が流れ、デーヴァダッタは病に倒れ九ヶ月ほど床に臥せていた。自分の死が近いことを悟った彼は一度仏陀に会って過去の自分の過ちを謝罪したいと強く思った。そして周囲の反対を押し切って懺悔の旅にでたのである。その道中、蓮の花が咲く池の近くで彼は旅で汚れた体を洗い清めるために乗っていた籠から降りた。そして大地の感触を両足で確かめ、二歩三歩と歩きかけた時、突然彼の足が大地に沈みはじめた。驚いたデーヴァダッタはそこから逃れようと必死にもがいたが、くるぶし、膝、腰、胸、首と引き込まれ、彼の身体は完全に大地に飲み込まれた。この悲惨な出来事は仏陀の耳にもとどいた。「尊者よ、デーヴァダッタは死後どの世界に生まれ変わったのでしょうか?」と比丘の一人が質問した。「彼は無間地獄に堕ちた」と仏陀は答えられた。「尊者よ、それでは彼はこの世で苦しみ、さらにあの世でも苦しむのですか?」と比丘が質問した。仏陀は、「比丘たちよ、その通りである。悪行の報果はその本人を襲う」と答えられ、「悪いことをした人は、この世で苦しみ、あの世で苦しみ、二つの世において苦しむ。自分は悪いことをしたと苦しみ、悪趣 (S) *durugati* (P) *duḥgati* 悪行を犯した人は、その報果として八十九心の欲界不善熟意識界によって死後、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅などの悪趣地のいずれかに結生してさらなる苦痛を受ける」と説く。無限地獄は阿鼻地獄とも言われ、苦しみが休みなく続く地獄である。この無間地獄に堕ちる悪行は次の五つである。①母を殺す、②父を殺す、③阿羅漢を殺す、④仏身から血を流す、⑤サンガの和合を破る。デーヴァダッタは第四と第五番目を犯した。人間は六道 (地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上) を輪廻するといひ、現実の人生にあてはめると、地獄 (瞋恚・怒り)・餓鬼 (貪欲)・畜生 (癡・愚かさ)・修羅 (争い)・人間・天上 (喜悦)。人間界も、さらに天上界も悪趣と考えられていることは注目すべきであり、古代インド人にとっては、人間に生まれ変わることが大きな願いであったとされている (と説かれたのである)<sup>(20)</sup>。

この句は、釈尊殺害を図ったデーヴァダッタの罪状を告発する件である。それも再三再四に亘って。この罪業の故に、現世でも、来世で

もデーヴァダッタは苦しみから逃れることができないとするのであり、彼の悪行が現世ばかりでなく、過去世においてもあったとされる。民衆から尊敬される釈尊への嫉妬から、釈尊に敵意を抱き、繰り返し殺害を試み、流血事件が起こされたのである。大地が割け、全身が大地に飲み込まれ、死後、無間地獄（阿鼻地獄）に生まれ変わるとされるのである。

この逸話は、悪因悪果を示すものであり、デーヴァダッタのような極悪人は無間地獄に堕ちるとされるのであるが、「善人なほもて往生す、いはんや悪人をや」<sup>(21)</sup>との親鸞の「悪人正機」説を想起せざるを得ない。死の直前に、病床を離れた釈尊に面会し、自らの行為を懺悔して許しを乞うている。しかし、釈尊はこの願いを受け入れず、生きながらも壮絶な苦しみを味わわせ、死後は無間（阿鼻）地獄に堕とさすのである。しかし、親鸞は「自力のこゝろをひろがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなる、ことあるべからざるをあはれみたまひて、願をこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他人をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき」<sup>(22)</sup>。

「一 一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしということ、この条は、十悪、五逆の罪人、日ごろ念仏をまうさずして、命終のときはじめて善知識のをしへにて、一念まうせば、八十億劫のつみを滅し、十年まうせば八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十悪五逆の軽重をしらせんがために、一念十念といへるか。滅罪の利益なり、いまだわれらが信ずるところにをよばず。……摂取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念仏まうさずしてをはるとも、すみやかに往生をとぐべし」<sup>(23)</sup>と。すなわち、たとえ十悪五逆の悪人と雖も、本心からの信心で念仏するならば、往生するとしたのである。『観無量寿経』の「佛告阿難及韋提希、下品下生者、或有衆生、作不善業五逆十惡、具諸不善。如此愚人、以惡業故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮。如此愚人、臨命終時、遇善知識、種種安慰、爲說佛法、教令念佛。彼人苦逼、不遑念佛。善友告言、汝若不能念彼者、應稱無量壽佛。如是至心、令聲不絕、具足十念、稱南無阿彌陀佛。稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪、命終之時、見金蓮華、猶如日輪、住其人前。如一念頃、即得往生極樂世界、於蓮華中、滿十二大劫、蓮華方開。觀世音大勢至、以大悲音聲。爲其廣說諸法實相除滅罪法。聞已歡喜、應時即發菩提之心。是名下品下生者。是名下輩生想、名第十六觀」<sup>(24)</sup>と説く。五逆十悪の下品下生者も本心から「南無阿彌陀仏」と念仏すれば往生できるとしている。原始仏教の考え方と、大乘仏教である浄土信仰の差異が見られるのである。法然は、五逆十悪のものでも往生できるとし、親鸞はその説を發展・定着させ

たのである。<sup>(25)</sup>

如来は悩まされない

Gataddhino visokassa

vippanuttassa sabbadhi,

Sabbagantappahinassa

pariāho na vijāti. (90)

For him who has completed the journey, for him who is sorrowless, for him who is wholly free from everything, for him who has destroyed all ties, the fever (of passion) does not exist. (90)

「輪廻」の旅を終え、離憂にして、一切処において解脱する。一切の束縛を捨てた「阿羅漢たち」には、「煩惱という」熱は存在しない。<sup>(26)</sup>  
(90)

ある日、仏陀に殺意を持つデーヴァダッタが岩山に隠れて大きな岩を仏陀めがけて落とした。しかし、幸いにも仏陀は無事だったが、その時、足の親指を負傷された。仏陀は弟子であり名医でもあるジイーヴァカ・コマラバッチャ (P) Jivaka-Komārabhacca (S) Jivaka-Komārabhīya 耆婆、時縛迦、時婆、尸縛迦・固活、能活、活童子、寿命童子・名医) の僧院に運ばれ治療を受けた。ジイーヴァカは「……この傷は化膿する可能性がある。患部の包帯を繰り返し新しいものに取り替える必要がある」と診断した。しかし、彼には町へ診察に行く用事があり、「尊者よ、私は今から町の患者を往診しなければなりません。夜までには戻ります」と言い残して急ぎ出発した。ようやく町での診察を終えたジイーヴァカは、すぐに仏陀の所に戻ろうとしたが、すでに町の通行門は閉じられていた。「しまった！」とジイーヴァカは焦ったが、しかし、どうにもならず翌朝までここで待つしかなかった。ちょうどその頃、仏陀はお供のアーナンダに命じて患部の包帯を新しいものに取り替えさせ、傷が治りかけているのを知った。

翌朝、ジイーヴァカは開門と同時に仏陀の所へ馳せ参じ、僧院に飛び込むや、「尊者よ、傷は大丈夫ですか！ 痛くはありませんか？ 苦しくはありませんか？」と仏陀の容体を心配しながら伺った。仏陀は、「ジイーヴァカよ、私の傷はよくなった。そして如来には心に関する苦痛や痛みなどはない」と答えられ、「すでに輪廻という旅を終え、憂いがなく、あらゆることから自由である、一切の束縛 (P) sabbagantā (S) sarvabandha 一切の束縛、一切の繫縛)。ここでは次の四つのことをさす。 1 貪欲 (P) abhijhā (S) abhidhīyā) 2 瞋恚 (P) bypāda

[S]byādhita) 3 戒禁取 ([P]sīlābhataparāmāsa [S]śīla-vrata parāmarśa) 4 悪見に基づき自分の見解が正しいと固執する (idānīaccābhīnivesas) へてを捨てた阿羅漢たち ([S]arahant [P]arahant 一切の煩惱を滅尽した、最高位の悟りをえた聖者・無学の聖者・漏尽者・最上者) には煩惱という熱は存在しない」と説かれたのである。<sup>(27)</sup>

デーヴァダッタの山での投石による負傷を負った釈尊と名医ジューヴァカの逸話である。身体への配慮を怠らなかつた釈尊であるが、ジューヴァカの治療の際の些細な指示をしつかり実行し、アーナンダに命じて、傷の処置を施したとするものである。一切の束縛から解放された聖者には、苦痛なるものは存在しないというのである。

デーヴァダッタは如来の殺害を求める

Yassa accantaḍḍusīṭṭyaṃ

māluva sālanivohatāṃ

Karoti so tathā tīṇaṃ

yathā naṃ icchaṃ diṣo. (162)

Just as a jungle creeper ([P]māluva) strangles the tree ([P]sāla) on which it grows, even so a man who is exceedingly depraved harms himself as an enemy might wish.

沙羅の樹が葛に覆われて「やがて枯れる」如く、限度を超える破戒〔悪行〕をおこなう〔人は〕、敵が欲するままに〔相手を苦しめる〕如く、自分自身に対しておこなう。<sup>(28)</sup>

ある日、法堂 ([P]dhammasabha) において比丘たちが雑談をしていた。そこへ仏陀が入ってこられ、「比丘たちよ、一体何について話しているのか？」とたずねられた。比丘の一人が、「尊者よ、私たちはデーヴァダッタについて話しておりました。しかし、実にあの男は恥知らずで強欲な男です。彼はアジャータサットゥをそそのかして父上ビンビサーラ王を死に追いやり、さらに尊者を三度にわたって殺そうとしました」と答えた。仏陀は、「比丘たちよ、デーヴァダッタはこの世だけではなく過去世においても私を殺そうとしたが、やはり失敗した」と語られ、「比丘たちよ、ちょうど沙羅の樹に葛がまとい付き、やがてその樹を枯れさせるように、限度を超える破戒〔限度を超える破戒 ([P]accanta+ḍḍusīṭṭyaṃ [S]atyanta+duṣṭā)〕限度を超える悪戒・悪徳とも訳され、必ず無間地獄に堕ちる五無間業を意味する」を犯し墮落した者の行為は、敵が欲しいままに敗者に行うが如く、自分自身を苦しめる」と説かれたのである。この説法によって比丘たちは

預流果を得た。<sup>(29)</sup>

ここに登場するデーヴァダッタ、アジャータサットウの逸話は「王舎城の悲劇」として有名な逸話であり、デーヴァダッタに唆され、父王を殺し、母后ヴァイデーヒー (P)Vedehi [S]Vaidehi 韋提希、毘提希、鞞陀提、吠提晒、吠題晒…思惟、思勝、勝身、勝妙身) を幽閉して即位したアジャータサットウは、釈尊の教化により懺悔し、仏教の保護者となった。この「王舎城の悲劇」の逸話に関連の深い『觀無量壽經』の概要を示してみよう。

アジャータサットウはデーヴァダッタに唆されて父王を幽閉し、王位を篡奪し、餓えに苦しむ父王を助けようとして自分の身体に蜜を塗って夫を助けようとした母親のヴァイデーヒーすらも殺害しようとする。聡明で智慧者の大臣のチャンドラプラディパー (P)Candrapradipa [S]Candraprabha 月光) の「母の殺害は、クシャトリア (S)ksatriya、刹帝利 武士身分) の名を汚すことになり、チャンダーラ (P)Scandala 梅陀羅…賤民、嚴熾、暴悪、屠者、殺者 インドにおけるアウトカーストの賤民) の(所行)である。ここに住まわしておくことはできない」と医師で大臣でもあるジーヴァカの「母を殺してはならない」の二大臣の諫言により、その場での殺害は思いとどまるが、母を牢獄に幽閉することになった。(妻の幽閉を知った父王は自ら舌を噛み切って死んだとの逸話もある。) ヴァイデーヒーは牢獄でのたうちまわり、靈鷲山に向かって師を礼拝した、アーナンダ長老、マハーモッガラーナ長老の慰問を願う。師は、両長老をヴァイデーヒーのもとに遣わし、師への礼拝を終わった彼女が見上げると、左右にアーナンダ長老、マハーモッガラーナ長老を従えた、紫色を帯びた金色に輝く釈尊の姿が虚空の蓮華座にあり、シャクラ (S)Sakra 帝釋、帝釋天 インドラ神、大自在天 佛教神話においては、忉利天の主で、須彌山頂の喜見域に住むとされる)、ブラフマン (S)Brahman 梵天 帝釋天と並んで護法神と見なされた)・護世の天人たちは花を手向けて供養していた。釈尊の姿を見たヴァイデーヒーは、大地に身を投げ出し、号泣して導師に「尊き師よ、私は、何の罪があつて、このような悪しき子を産んだのでしょうか?どうか私に苦悩や憂いのない世界を説いて下さい。私に清らかな行いのある世界をお見せ下さい。」と懇願した。釈尊は、直ちにシヴァラ (S)Svata 大自在天、シヴァ神 自在天外道の主神) の宮殿のような佛国土を現出し、彼女は「この佛国土は、清らかであり、今、〈幸あるところ〉という世界の Amita (S)Amita 阿彌陀 西方淨土、極樂世界にあつて、法を説く佛) 佛のみもとに生まれたいと願っております」その時、導師は微笑され、導師は口から五色の光を発し、ピンピサーラ王を照らし、王は、不還果



(もう決して生まれ変わって来ない境地)を得た。尊師は「阿彌陀佛のおられるところがここから遠くはない。かの佛国土に生まれたいと願う者は、三つの福利を修めなければならない。一つには、父母に孝養をつくし、師につかえ、慈しみの心をもって生けるものを殺さず、十種の善行を行なうこと、二つには、佛法僧の三宝に帰依し、多くの倫理的規定を守り、誇りを失わないこと、三つには、覺りに向かうという願いをおこし、深く因果の道理を信じ、大乘經典を誦誦し、他の人たちにも勧めることである。」と述べ、思念を一処に集中して觀想し、十六の觀想、十六の冥想を行なつて(阿彌陀佛のおられる)西方を觀想するよう求める。最後の觀想、最後の冥想は、五逆罪と十種の惡行を犯し、(その他)さまざまの不善を行ない、このような惡しき行為の結果、惡しき道に墮ち、長い間くり返しくり返し苦惱を受けて止むことのない愚かな者である、(下品下生の者)さえも、心からの声を絶やさぬようにして、十念を具えて、『南無阿彌陀佛』と、佛の名を称えるならば、一念一念と称える中に、八十億劫の間、彼を生と死とを結びつける罪から免れさせる。アヴァローキテーシヴァラ([S]Avalokiteśvara 阿縛盧枳低濕伐羅、觀音菩薩、光世音(菩薩)、觀世音(菩薩)、觀自在(菩薩)、救世菩薩、施無畏者、蓮華手菩薩 淨土教では『觀無量壽經』の説くところにより阿彌陀如來の脇侍として大勢至菩薩と共に安置されることが多い。觀音菩薩は大慈大悲を本誓とする)とマハースターマプラープタ([S]Mahāsthāma-prapta 大勢至菩薩、得大勢至菩薩 阿彌陀三尊の右脇侍で、「仏の智門を司り、衆生の菩提心を起こさせる。智慧の光を持って一切を照らし衆生が地獄・餓鬼界へ落ちないように救う菩薩)は、大悲の音声でこの者のために広く存在の実相と罪を除き滅ぼす法を説き、この者は聞き終つて歡喜し、たちまち覺りに向かう心を起こす」十六番目の冥想をする。ここでは、五逆十罪の者でも、本心からの救済を求める『南無阿彌陀佛』と称えれば、佛国土に行くことができる<sup>(30)</sup>といるのである。

『ダンマパダ』では、五逆・十罪を犯した者は、罪の重さのゆえに、救われることなく、地獄に墮ちるが、大乘經典の一つである『觀無量壽經』では、こうした者も、本心からの『南無阿彌陀佛』の称名で、救済されるのであり、これを受けて親鸞は、「弥陀の本願には老少善惡のひとをえられず、たゞ信心を要とすとするべし。そのゆへは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてましますしかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと、云々」<sup>(31)</sup>「善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや」<sup>(32)</sup>という「惡人正機説」を説いた。「世尊よ、もしも、かのわ



たくしの佛国土に、地獄に墮ちる者や、動物界に生まれる者や、餓鬼の境地に陥る者や、アスラ (S) asura 阿修羅 ①ペルシアの古語 ahura と語源が同じで、初めは善神の名前であった。②後代のインドでは、神 (S) sura でない者という語源解釈が施され、非天すなわち悪神とされ、常にインドラ神と戦い、あるいは日や月と争う者となる。神々と戦闘を交えるという神話は、ヴェーダ聖典や叙事詩などに見られる。闘争してやまぬ者。争う生存者。佛教では六道の一つ、八部衆の一つとされ、一種の鬼神とみられ、須彌山下の海底にその住居があるとされる。)の種類となる者があるようであつたら、その間はわたくしは、この上ない正しい覺りを現に覺ることがありませんように。」との修行僧ダルマーカー (S) Dharmakara 曇摩迦留、曇摩迦・法蔵、法処、法 (宝) 蔵) の四十九願の中の第一願に示される、悪行の因果で地獄に墮ちる者等々が、すべて救われることを重んじ、その第十九願で「世尊よ、もしも、わたくしが覺りを得た後に、無量・無數の佛国土における生ける者どもが、わたくしの名を聞き、その佛国土に生まれないという心をおこし、いろいろな善の根が熟するようにしたいとして、そのかれらが——無間業を造った者どもと、正しい法を誹謗するという障礙をなした者どもを除いて——たとえ、心をおこすことが十返に過ぎなかったとしても、その佛国土に生まれないようなことがあるようであつたら、その間はわたくしは、この上ない正しい覺りを現に覺ることがありませんように。」と示して、五逆十罪の者は、救うことができないとする『大無量壽經』の示す所とは異なっている。先に『觀無量壽經』を取り上げたが、そこに登場したアジャサトゥに纏わる『阿闍世コンプレックス』なるコンプレックスがものが古沢平作氏によって提唱され、小此木圭吾氏に引き継がれている。<sup>(34)</sup> 古沢による「阿闍世物語」は、親鸞の『教行信証』によっているばかりでなく、古沢独自の解釈もあり、古沢の脚色した『阿闍世物語』である。母への敵愾心による、自我の屈折を「阿闍世コンプレックス」として描こうとする。<sup>(35)</sup>

『望月佛教大辞典』の「阿闍世王」の項では「未生怨、又は法逆と譯す。中印度摩揭陀國頻婆沙羅王の太子にして、母は韋提希なり。故に又阿闍世韋提希と稱す。後父王を弑して自立し大に覇權を中印度に張りし大王なり。初め父王頻婆沙羅、年老いて子なし。時に相師占うて曰はく、一の仙人あり、今現に存生するも、死後は必ず王の太子として再生すべしと。王之を聞き、其の期の至るを待つ能はず、窃に人をして彼の仙人を殺さしむ。既にして夫人韋提希孕めるあり、期至りて阿闍世を生む。亦相師をして之を占はしむるに、彼れ曰はく、此の子後當に父王を害すべしと。王懼れて之を高樓より地に棄てしむるに、死せずして唯だ其の一指を折る。斯の如く未生以前に已に怨を結ぶ

を以て未生怨と號し、又婆羅留支 (P[ro]Bharuci) の稱あり。婆羅留支は折指の義なり。太子既に指を折れるのみにて死せざりしかば、父王は之を養育せしめて深く寵愛せり。長ずるに及び、適ま提婆達多是仏に背きて新に教團を組織し、仍て阿闍世に勸めて、父王を弑して新王たらしめ、自らは亦佛陀を害して新佛たらんことを企てしが、阿闍世は父王を獄中に幽し、劍を以て足底を削り、遂にそれをして餓死せしめ、自立して王となりしも、提婆は佛陀を害せんとして其の意を果さざりしと云ふ。……斯くて阿闍世は自立して王となりしも悔悟の念に堪はず、遂に諸臣に對して悶悶の情を述べ、自ら慰安するの法を問ひしに、異母兄耆婆は佛陀に詣づべきことを勸めたるを以て、茲に阿闍世は佛所に詣で、其の教を受け、遂に熱心なる佛陀の歸依者となるに至れり。……今若し佛陀の入滅を聞かば必ず熱血を嘔いて死すべしとし、因て方便を設け、行雨大臣をして一園中の妙堂殿に於て佛陀の生天乃至涅槃等の一代の化迹を圖畫せしめ、次で又八函 (二説に壺) を作りて人の量と等しからめ、前七函の内に生酥を滿置し、第八函に牛頭栴檀香水を盛り、阿闍世をして來り見せしむ。王は其の圖畫を見次で佛陀の已に入滅し給へるを知り、悶絶して地に倒れしを以て、即ち之を先づ第一蘇函中に投じ、次第に第八香水函に投ずるに、彼れは漸く蘇生せりと云へり。」と記し、「耆提希」の項では、「耆提希 中印度摩揭陀國頻婆沙羅王の夫人にして、阿闍世王の生母なり。其の名稱及び郷國に關しては諸説あり、法華經玄贊第二本に吠題呬弗咀多を釋する中、「今云はく、吠は是れ勝の義、題呬は身と云ふ。即ち東毘提訶の名なり。彼の毘提訶は男聲中の呼なり、此の吠題呬は女聲中の呼なり。此れは是れ彼の山の名、亦是れは彼の山中の神の名なり。彼れに従つて乞ひ得たり、因て以て名となす」と云へり。是れ彼の實名を耆提希とし、且つ彼れを東毘提訶 (P[ro]Vidha) の産となせるが如し。慧印三昧經には「瓶沙王の第一夫人を名づけて拔陀斯利 (P[ro]Sribhadra) となす、阿闍世の母なり。亘那臘者拘隣の女なり」と云へり。……又一説には毘提訶國毘盧遮迦王の大臣沙迦羅 (P[ro]Sakala) なる者、他の大臣の嫉みによりて其の二子勺波羅 (P[ro]Gopala) 及び師子 (P[ro]Simha) と共に毘舍離國に通れ、暫時にして市民に貴ばれて、其の統治者の一人に選ばれたりしが、二子は此の地にて婚し、師子は婆沙毘 (P[ro]Vasavi) なる子を生めり。時に豫言あり。此の女子は父を殺して自ら王冠を戴くべき子を産まんと。父の沙迦羅死するに及び、師子亦之に代りて統治者の一人となり、其の後摩揭陀國の頻婆沙羅王は、師子の女婆沙毘を娶りしに、毘提訶の出なりし故を以て、其の本名よりも耆提希の名によりて知られ、尋いで子を擧ぐるに及び、前の豫言によりて之を阿闍世即ち未生怨と名づけたるなりと云ひ、或は又頻婆沙羅王には二大夫人あり。……未だ何れか是なるを詳にせず。その事蹟に關しては他に何等傳ふる所なきも、觀無量壽經には阿闍世が父

王頻婆沙羅を七重の室内に幽閉し、餓死せしめんと企てたる時、夫人は身に麝蜜を塗り、環珞に漿を盛りて密に之を王に給し、且つ自ら深く厭世の心を起し、佛陀に求哀懺悔せしを以て、佛陀は其の請を受けて王宮に來現し、この經を演說せられたることを記せり。されば淨土他力教は、此の夫人によりて始めて開闢せられたるものと謂ふべし。」と記している。

さらに『大般涅槃經』の梵行品では「阿闍世王。其性弊惡意行殺戮具口四惡。貪恚愚癡其心熾盛。唯見現在不見未來。純以惡人而爲眷屬。貪著現世五欲樂故。父王無辜橫加逆害<sup>(38)</sup>。」阿闍世王はその性質は、殺戮を好み、四惡を口にし、貪りの心は熾盛で、著しく現世で五欲の樂を貪り、純ではあるが一族の中の惡人に唆されて無辜の父王に害を加えた。「因害父已心生悔熱。身諸環珞妓樂不御。心悔熱故遍體生瘡。其瘡臭穢不可附近。尋自念言我今此身已受花報。地獄果報將近不遠。爾時其母字韋提希。以種種藥而爲傳之。其瘡遂增無有降損。王即白母如是瘡者。從心而生非四大起。若言衆生有能治者無有是處<sup>(39)</sup>。」と父王への加害によつて魔されまた全身隈なく瘡が現われ、新王はその瘡の惡臭のために悶絶し、自らの行為の報いを受け、地獄に墮ちる日は遠くはないと考えるようになっていた。そのとき母の韋提希は懸命に治療につとめたが、藥石効なく、その瘡は増殖し、日に日に衰弱していった。王は母に、この瘡は物質的原因で生じたものではなくて、心性のものであり、どんな名医でもこれを治癒することはできないと白した。新王の憔悴を見た大臣の月稱は新王に「如何なされました。お顔色が優れませんが」「私は父王に逆害を加えたために、こうした心身の病に悩まされている。間もなく地獄に墮ちるだろう。」この言葉に対して「大王。莫大愁苦。即說偈言

若常愁苦 愁遂增長 如人憊眼  
眠則滋多 貪婬嗜酒 亦復如是

如王所言。世有五人不得地獄。誰往見之來語王耶。言地獄者即是世間。多智者說如王所言。世無良醫治身心者。」と論す<sup>(40)</sup>。また名医と名高く、一切の知見を持ち自在定をえている富蘭那 (Purana または Pirana 富蘭那迦葉 一切の法は虚空のこととして生滅なしとし、善惡の業報を認めない無道徳論者) は、「畢竟修習清淨梵行。常爲無量無邊衆生。演說無上涅槃之道。」と説き、阿闍世は「審能如是滅除我罪我當歸依<sup>(41)</sup>」と答え、更に別の大臣の蔵徳は「何故面貌憔悴唇口乾焦。音聲微細猶如怯人。見大怨敵顔色皴裂。將何所苦身痛耶爲心痛乎。」と尋ねた上で、王の「父を殺害したために、苦身心痛している」と答えると、「且莫愁怖法有二種。一者出家。二者王法。王法者。謂害其

父則王國土雖云是逆實無有罪。如迦羅羅虫要壞母腹然後乃生。生法如是雖破母身實亦無罪。驟懷妊等亦復如是。治國之法。法應如是。雖殺父兄實無有罪。出家法者乃至蚊蟻殺亦有罪<sup>(42)</sup>。と慰めた。更に別の大臣の實得が「王様の容色が愁悴されておられるのは何故ですか」と尋ねると、王は自分の誕生に際して、父王は占師から、「私の壽命は三年後尽きますが、その時に王は子どもに恵まれるでしょう。しかしその子は、父親を殺害するでしょう」との占を告げたことを受けて、「如其父王修解脱者害則有罪。若治國法殺則無罪。大王。非法者名爲非法。無法者名爲無法。譬如無子名爲無子。亦如惡子名之無子。雖言無子實非無子。如食無鹽名爲無鹽。食若少鹽亦名無鹽。如河無水名之無水。若有少水亦名無水。如念念滅亦言無常。雖住一劫亦名無常。如人受苦名爲無樂。雖受少樂亦名無樂。如不自在名之無我。雖少自在亦名無我。如闇夜時名之無日。雲霧之時亦言無日。大王。雖言少法名爲無法。實非無法。願王留神聽臣所說。一切衆生皆有餘業。以業緣故數受生死。若使先王有餘業者。今王殺之竟有何罪<sup>(43)</sup>。」と慰める。これを承けて、「王舎城の近くに一切知見をもつ大師の刪闍耶毘羅胝子があり、自在隨意に善惡を作す者であり、王の身心の苦痛を療治し、王の罪を除去する者である」と告げると、王は近辺を隈なく調べて彼を探し出し、彼に「我が罪を除去させよ、彼に歸依しよう」と諭した。次に王の慰問にきた臣の知義は、「王不聞耶。昔者有王。名曰羅摩。害其父已得紹王位。跋提大王。毘樓眞王。那睺沙王。迦帝迦王。毘舍佉王。月光明王。日光明王。愛王。持多人王。如是等王。皆害其父得紹王位。然無一王入地獄者。於今現在毘琉璃王優陀那王惡性王鼠王蓮花王。如是等王皆害其父。悉無一王生愁惱者。雖言地獄餓鬼天中誰有見者。大王。唯有二有。一者人道。二者畜生。雖有是二非因緣生非因緣死。若非因緣何有善惡。唯願大王勿懷愁怖<sup>(44)</sup>。」「過去の立派な王たちの中で、何人もの王が父を殺して王の位を継いでおられるのであって、父を殺した王というのは決して阿闍世王だけではなく、その王たちも誰一人地獄に墮ちた者はいない。そして人の生き死には、因縁によるのではなく、まったくの偶然によるのであるから、父王の死に責任を感じて悩まれることはない。王の身心の悩みを解消してくれるのは、一切を知見する、阿耆多翅舍欽婆羅という名の大師が、悉無罪福無施戒定の者であり、今この王舎城近くにいるので、会われれば彼に王の衆罪は除滅すると。さらにまた大臣の吉徳は、「今當聽臣所說實無殺害。若有我者實亦無害。若無我者復無所害。何以故。若有我者常不變易。以常住故不可殺害。不破不壞不繫不縛不瞋不喜猶如虛空。云何當有殺害之罪。若無我者諸法無常。以無常故念念壞滅。念念滅故殺者死者皆念念滅。若念念滅誰當有罪。大王。如火燒木。火則無罪。如斧斫樹。斧亦無罪。如鎌刈草。鎌實無罪。如刀殺人。刀實非人。刀既無罪。人云何罪。如毒殺人。毒實非人。毒藥非罪。人云何罪。一切萬物皆亦如是。

實無殺害。云何有罪。<sup>(45)</sup>「生き者に『我』(主体)があるならば、その『我』は変化するはずがないのだから、殺されるといふ変化は起こらないし、また『我』がないというならば、殺される『我』は存在しないのだから、殺そうにも殺しようがなく、いずれにしても殺害ということと自体が成り立たず、王には罪はないとして、王の身心の苦痛を癒すのは医師ではなく、一切知見を有し三世を明了する、迦羅鳩駄迦施延なる名の大師で、衆生の内外の衆罪を除くことができるし、この王舎城の近くにいたので、彼に面会すればあなたの諸々の罪は消えるでしょうと告げる。もう一人の大臣の無所畏は、「夫利利者。名爲王種。若爲國土。若爲沙門及婆羅門。爲安人民雖復殺害無有罪也。先王雖復恭敬沙門。不能承事諸婆羅門。心無平等。心無平等故則非利利。大王。今者爲欲供養諸婆羅門。殺害先王。當有何罪。大王。實無殺害。夫殺害者殺害壽命。命名風氣。風氣之性不可殺害。云何害命而當有罪。」<sup>(46)</sup>と阿闍世王は誤った王の道を正そうとされたのだから、王族としてふさわしいことをされたわけで、罪があるはずがないとして、王の身心の苦痛を癒すことができるのは、一切の知見を持ち、衆生を憐愍し衆生の諸根の利鈍をよく知り、一切の随宜方便を達解して、世間の法に汚れることなく、清浄なる梵行を寂靜修習している尼乾陀若提子という名の大師が、王舎城の近くにいたので面会すれば、衆罪が消滅するであろうと。この時に名臣であり大臣でもある耆婆が慰問に訪れて、「眠られない」とお聞きしましたが、王は良医妙藥呪術も私の身心の不調を癒すことができない、私は自分の罪過のために、破戒者であるために地獄に墮ちるに違いないと考えると安眠すらできないと告白する。耆婆は「王雖作罪心生重悔而懷慚愧」<sup>(47)</sup>「有慚愧故則能恭敬父母師長。」<sup>(48)</sup>「智者有二。一者不造諸惡。二者作已懺悔。愚者亦二。一者作罪。二者覆藏」<sup>(49)</sup>「王若懺悔懷慚愧者。罪即除滅清淨如本」<sup>(50)</sup>と王が自ら罪過を認め、慚愧すれば、絶えない身心の不調から解放されると説き、「諸佛世尊所不能治」<sup>(51)</sup>「大王今者。非一闍提。」<sup>(52)</sup>〔Sicchantika 生死を欲して出離を求めない者 先天的に佛になる可能性をもたぬ者 なんととも教化されえない者 いかにも修行しても到底さとりえない者 善根を断じた人〕云何而言不可救療<sup>(53)</sup>と述べ、大慈大悲を具えた世尊が今王舎城におられるのでは是非ともその教えをお聞きなさいと勧める。入滅が間近であると心得ている世尊は、沙羅雙樹の間から阿闍世が悶絶して地に倒れているのを知られ、「我今當爲是王住世至無量劫不入涅槃」<sup>(54)</sup>と語り、阿闍世のために、「月愛三昧」に入られ、大光明を放たれ、その光が王の身に届くと、「身瘡即愈鬱蒸除滅。王覺瘡愈身體清涼」<sup>(55)</sup>と一瞬にして身心の苦痛が癒えるいう不可思議な現象が起こり、王は沙羅の林に入って世尊に見え、「我見世間從憍蘭子生憍蘭樹。不見憍蘭生梅檀樹。我今始見從憍蘭子生梅檀樹。憍蘭子者我身是也。梅檀樹者即是我心無根信也。無根者。我初不知恭敬如來。不信法僧。是名無根。



世尊。我若不遇如來世尊。當於無量阿僧祇劫在大地獄受無量苦。我今見佛以是見佛所得功德。破壞衆生所有一切煩惱惡心<sup>(54)</sup>」と三宝に帰依することを世尊に告白し、世尊は「若有人能發菩提心。當知是人則爲莊嚴諸佛大衆。」<sup>(55)</sup>「大王當知。菩提之心乃有如是無量果報。」<sup>(56)</sup>と告げるのである。

阿含 (S)īgāṇa 形づく 男到者…由来…起原…水路…富裕、所得、財産…獲得…學問、知識…學…教訓、傳統…教本、規則…重字) 經典(編纂された經典)とは異なる「編纂された經典の内容をもとにまったく新しい思想を展開し、その教えをすでに亡くなった釋尊に語らせる、大乘仏教思想を謳歌した、創作經典」である「大乘經典」がある。「編纂された經典」は、パーリ語で伝えられているのに対して、創作經典はサンスクリット語で書かれている。<sup>(57)</sup>

ここで取り上げた『觀無量壽經』『阿彌陀經』『大般涅槃經』は大乘經典であり、情況をそのまま伝えるものではないが、説こうとする教理を明確にしようとする限りで、伝承されたことを描きなおしているものである。

阿闍世に関する逸話は次のように整理することができよう。

① 年老いた頻婆沙羅王は、嫡男に恵まれなかったため、占師に子に恵まれるかを占わせる。

② 占師は、「三年後に、ある仙人が死ぬが、その生まれ変わりとして、妃の胎内に男子が宿るが、その子は王を殺害することになるう」と告げた。

③ 頻婆沙羅王は、三年の月日を待つことができず、仙人を殺害し、そのことで、妃韋提希の胎内に男子が宿った。

④ 王子が誕生し、王と妃は、嬰兒に「善見」と名付けたが、誰も彼をそう呼ばず、「阿闍世(未生怨)」と呼んだ。

⑤ 王と妃は占師の「王子が成長の後、父王を殺害する」との預言を忘れられない、王と妃は、嬰兒を高樓から突き落とした。だが、王子は命を落とすことなく、指を折っただけであった。

⑥ 王子はすくすくと成長し、「残虐で、貪欲な」男に育ち、とうとう父王を牢獄に幽閉し、餓死させようとした。(父親の幽閉……父親への憎しみ)

⑦ このことを知った母親である妃は、王のために飲食品を隠して毎日のように王を訪問し、王に糧食を与えた。(夫婦関係の認識あるい

は原光景)

⑧父王が存命であることに不信をもった阿闍世王が臣下に尋ねると、妃が密かに前王に糧食を与えていることを知り、妃である母親を剣で殺害しようとする。(母親への憎しみ)

⑨これを知った、大臣は「母親を殺害は、クシャトリアの所行ではなく、チャンダーラの所行である」「母親を殺す者は地獄に堕ちる」との諫言により、王は母親の殺害を思いとどまり、母親をも幽閉した。

⑩幽閉されていた父親の頻婆沙羅は、世尊の教えを受け、不還果を得て、涅槃に入る。幽閉された妃は、絶望のあまり、衰弱し、世尊に求哀懺悔して、その教えを求め、世尊による浄土の現出等を受け、心身の憔悴はおさまる。

⑪父を幽閉し、父親を死に追いやったことにより、阿闍世が「心因性」の瘡に罹り、全身に瘡が溢れ、悶絶する。(父親殺害と罪悪感)

⑫王の六人の大臣が、王を見舞い、対処法を進言する。

⑬王の義兄の耆婆が、王に自らの罪過を認め、懺悔し、世尊の受けるよう勧告する。

⑭耆婆の勧告にしたがって、王は世尊に会いに行くが、面会の直前に悶絶して地に倒れてしまう。(幻聴)

⑮世尊は、阿闍世のために、「月愛三昧」に入られ、大光明を放たれ、その光が王の身に届くと、「身瘡即愈鬱蒸除滅。王覺瘡愈身體清涼。」と一瞬にして身心の苦痛が癒えるという不可思議な現象が起こる。(救い)

⑯この光景を目の当たりにして、王は沙羅の林に入って世尊に、三宝に帰依することを誓う。

⑰世尊は、阿闍世のために、涅槃に入らないことを告げる。

阿闍世をめぐる人間関係はかなり輻輳している。「王舎城の悲劇」と呼ばれる逸話では、世継ぎを求める頻婆沙羅王と妃韋提希の、子どもへの関心が端緒であり、占師による占いの告示に立腹したこの夫婦による仙人の殺害があり、阿闍世を殺害しようとしたことが、阿闍世の父親への敵愾心となり、それが父王頻婆沙羅の幽閉と死へ追い込むこととなり(殺意の実行)となり、父王を助けようとする母親である妃の韋提希への殺意となり、二大臣の阿闍世への諫言による、母親の殺害の抑制となり、幽閉されることになった母親で妃の絶望となり、韋提希の願いに応える佛陀の力での浄土世界の現出による韋提希の信仰の深甚化、および阿闍世の身心の憔悴(心因性の瘡の全身にわたる



発生)、それによる阿闍世の悶絶(苦痛の発現)、義兄耆婆による苦痛の原因の指摘とその解消のための罪過の認容と、懺悔および世尊との面会・説諭を受けることへの勧告、更に世尊の「月愛三昧」による、身心の不快状況の解消、それによる阿闍世の三宝への帰依、世尊の阿闍世のために不入滅の決意の表明となっている。つまりは、端緒の父親への敵意(いわば「深層心理」(阿頼耶識) [Sālaya-vijñāna アーヤ識。個人存在の根本にある通常我々が意識することのない識であって、眼(げん)・耳(に)・鼻(び)・舌(ぜつ)・身(しん)・意(い)・末那(まな)・阿頼耶の八識(はっしき)の最深層に位置するとされる。瑜伽行派(ゆがぎょうは)独自の概念である。〈阿頼耶識〉とは、サンスクリット語 *ālaya* の音写と、*viñāna* の意識〈識〉との合成語であり、玄奘以前の漢訳仏典では〈阿黎耶識〉〈阿梨耶識〉と表記される。*ālaya* とは住処の意であるとされ、そこに過去のすべての経験の潜在余力(習気(じつけ))が蓄積されている蔵のような存在であるから〈蔵識〉と訳される。この習気は、現在および未来における自己の身心および対象世界(現行(げんぎょう)法)、すなわち一切諸法(一切法)を生み出す因となるから種子(しゅうじ)とも呼ばれ、それら一切法の種子を保つ阿頼耶識のことを(一切種子識)ともいう。このように万有は阿頼耶識より縁起したものであるとする唯心論的な理論のことを、通常、〈阿頼耶識縁起説〉と称する。(岩波仏教辞典による)での敵意)が持続し、成長して王への殺害となり(意識された敵意)、それによる苦悩の発生(瘡の発生と全身への蔓延)、耆婆による罪過の認容と懺悔および世尊の教えの受容への勧告、「月愛三昧」に入った世尊による阿闍世の身心の不調の解消、阿闍世の三宝への帰依の表明、世尊の阿闍世を意識した入滅の否定の表明と複雑な様相を示す。このような状況が、「阿闍世コンプレックス」として取り上げられたのである。それは、父親への敵意に始まるコンプレックスであり、母への敵意へと発展したものだといえよう。

#### 裏切り者の僧

*Salābhani nāṭimañheyya*

*nesam piḥayaṇi care*

*Aññesaṇi piḥayaṇi bhikkhu*

*samādhin nādhigaccati.* (365)

One should not despise what one has received (by proper means), nor should one envy others their gains. The bhikkhu who envies others can not attain concentration (*samādhi*). (365)

自己の所得を軽蔑せず、他人のそれを羨むことなかれ！ 他人のそれを羨む比丘は、禪定に到達しない。(365)<sup>(58)</sup>

Appalābhopi ce bhikkhu

saḍḍhaṃ nāṭṭhaṃ,

Tam ve devā pasamsanti

suddhāvivātaṃ. (366)

Though he receives only a little, if a bhikkhu does not despise what he has received (by proper means), even the gods praise such a one who is pure in livelihood and is not slothful. (366)

僅かな利得といえども、比丘は自己の所得を軽蔑しない。清浄な生活にて、倦怠なき彼を、実に神々が賞賛する。(366)<sup>(59)</sup>

托鉢をしている一人の比丘が、毎日他人の家を一軒一軒回りながら信者から僅かな施しを受ける生活に不満をもった。ある日、仏陀の敵であるデーヴァダッタの弟子と親しくなり、デーヴァダッタの僧院を訪れてたくさんのお馳走をいただいた。これを知った仲間の比丘たちは仏陀に報告した。仏陀はこの弟子を呼ばれ事実を確認された。しかし、この比丘は、「尊者よ、私は確かにデーヴァダッタの僧院を訪れ、大いに歓迎されました。しかし、私は彼の教えを好んで受け入れた訳ではありません」と言った。仏陀は、「私の息子よ、お前が言う通り、デーヴァダッタの教えを受け入れなかったとしても、あのような行動は信者に人々に誤解を与え、お前がデーヴァダッタの弟子であると思われる」と注意され、「自分が受けた施しを軽く見ず、他人が受けた施しを羨むことなかれ。他人が受けた施しを妬む比丘は、禪定（禪定に到達しない）[P]samādhin nāḍḍhacchati」何故ならば、この比丘には軽蔑する [P]atimāṇati」と羨む [P]iḥayati」という心があるからである。軽蔑は、十四不善心所の慢に該当して貪因と痴因を有する八十九心中の十二不善心の悪見不相応の四貪欲心と相応する。又、羨むは十四不善心所の嫉に該当して瞋因と痴因を有する八十九心中の二瞋恚と相応する。即ち、初禪を得るために一時的に鎮伏しなければならぬ五蘊（貪欲・怒り・無氣力・不安・疑）が鎮伏されていなかったためこの比丘は初禪定に到達できないのである。又これらが含まれる五十二心中の十四不善心所は禪定だけでなく、悟りの道・果を得ることに妨げとなる。（十四不善心所 痴 無慚 無愧 掉拳 貪 見 慢 瞋 嫉 慳 惡作 惛沈 睡眠 疑）に到達しない」「自分が受けた施しが、例えば僅かであっても、比丘は不満を抱かない。清浄な生活を保ち、修行を怠らない彼を、実に神々が賞賛する」と説かれたのである。<sup>(60)</sup>

この偈頌は「近朱者赤、近墨者黑」<sup>(61)</sup>（傳玄 太子少博箴）を思い起こさせる。自分が意識していなくとも、他人からはその人の交友関係によってその人を評価されてしまう。世尊に対抗心を抱くデーヴァダッタに近づくことは、デーヴァダッタの支持者・後援者と見られても

仕方がないということを戒めるものである。妄りに「悪人」「敵対者」といわれるものとの交友を諫めるものである。「貧者の一燈」の<sup>(62)</sup>う至誠こそが貴ばれるべきであるとの姿勢と共通するものであり、豊かな布施に惑わされてはならないとも説くのである。

ジョーティカとジャーティラ

Yo' dha taṇhain pahantvāna

anāgāro paribhāje

Taṇhābhavapariikkhīṇāni

tamaṇaṇi brūmi brāhmaṇāni (416)

One who in this world gives up craving, and renounces worldly life, and become a bhikkhu, and who has destroyed craving and becoming, him I call a Brahman. (416)

この世において、渴愛を断ち切り、出家して遍歴をなし、愛有を滅尽せる彼を、私は婆羅門〔＝阿羅漢〕という。<sup>(416)</sup><sup>(63)</sup>

〔ジャティラ物語〕

昔、カッサパ・ブツダが完全涅槃に入られた後、阿羅漢を得た一人の修行僧がその遺骨を納める仏塔を建立するため各地を歩き人々に淨財をお願いしていた。そしてこの修行僧は一人の金細工職人にも施しをお願いしたが、間の悪いことに、ちょうど夫婦喧嘩の真最中であつた。たいへん機嫌が悪い金細工職人は修行僧の顔を見るなり、「お前の仏塔など水の中へ捨ててしまえ！ここから出て行け！」と怒鳴つたのである。この悪態に妻は、「お前さん、私に対して怒るなら、私だけに怒ってよ、もし叩きたければ、私だけを叩いてよ。しかし、今お前さんがしたことはたいへん悪いことなんだよ。どうしてこの尊い方を怒鳴るのよ」と激しく抗議した。この見幕に夫は驚き、自分のしたことを反省し、その罪滅ぼしに金製の花と三つの壺を作り、カッサパ・ブツダの仏塔に供養した。この善行によつて彼は、死後、大金持ちの娘の母胎に宿つた。しかし、この妊娠は禁じられた恋の結果であつたため、娘は両親に知られないように密かに出産をして、すぐに赤ん坊をカゴに入れて小川に流した。運よくこの赤ん坊は小川で沐浴をしている女性たちに拾われ、ジャティラ (□)jaṭṭila ↑ jaṭṭila 結髪者、結髪外道」と名付けられた。月日が流れ、ジャティラは一人の比丘のアドバイスによつてタツカシラー (Takkaṣiṭṭhā) という町の大商人の家に預けられた。そこで彼はこれから生きて行くために必要なことをいろいろ学び、やがて彼の才覚を認めた大商人の娘と結婚した。そして

新婚のジャティラ夫婦が新宅に引越すると、突然裏庭の大地が割れて金の鉞脈があらわれ、夫婦は大金持ちとなった。さらに月日が流れ、彼の息子三人がそれぞれ成人した頃、ジャティラは家族たちに出家を告げた。比丘になったジャティラはすぐに阿羅漢果を得た。ある日、仏陀は五百名の弟子たちと共にたく鉢に出掛けられ、ジャティラ長老も同行した。そして一行はジャティラ長老の家族から十五日間にわたり食べ物を受け付けて大いに歓迎された。その後、仲間の比丘たちがジャティラ長老に、「友よ、残して来た家族や財産に未練はないか?」とたずねた。長老は、「私は阿羅漢果を得たのでまったく執着はありません」と答えた。しかし、これを信ずることができない一部の比丘たちが仏陀にジャティラ長老は嘘をついたと訴えた。仏陀は、「比丘たちよ、私の息子ジャティラ長老はあらゆる渴愛と傲慢とを捨て去った。何故ならば、彼は実に阿羅漢果を得ているからである」と語られ、「この世において自己の渴愛を捨て去り、出家し比丘として遍歴の旅を続け、生存に対する渴愛を取り除いた彼を、私は婆羅門「阿羅漢」と呼ぶと説かれたのである。

〔ジョティカ物語〕

ジョティカ (Jotika→jotika 薫鉢) はたいへんな金持ちで彼が住む七階建ての豪邸には七つの門があり、それぞれに魔神が守衛をしていた。人々はこの豪邸を一目見ようと遠方からもやって来た。ある日、この噂を耳にしたビンビサーラ王とアジャータサット王子がジョティカの豪邸を訪問した。主人のジョティカから丁重な挨拶を受けて屋敷内を案内された王子は、この豪華さに圧倒され、「俺が王位に就いた時この屋敷からジョティカを追放してやる」と密かに決意した。月日が流れ、アジャータサット王子は父王を暗殺して王位についた。(原註)次に新王は軍隊を出兵させジョティカの屋敷を包囲したのである。しかし、七つの門を守る魔神たちの活躍によって逆に新王の軍隊が退却させられた。敗戦の将アジャータサットはようやくジェタヴァナ僧院まで逃げのび、本堂で仏陀の説法を拝聴しているジョティカの姿を見てその場に座り込んだ。新王の姿を見てジョティカは軽く笑みを浮かべた。何故ならば、彼は遙か昔において自分の財産が他人に取られないように強く祈願し、そして今成就したことを確認したからである。ジョティカはアジャータサット新王に、「私の両手にはめてある寶石の指輪をとることができますか?」とたずねた。新王はジョティカの指から寶石を抜き取ろうとしたが、うまくいかなかった。次にジョティカは新王に布を広げさせ、その上で再び両手を大きく広げ、「新王よ、どうぞ」と言った。今度は簡単に指輪が抜けた。彼は新王にこれら

を与え、仏陀に出家してサンガに入団したいと願ひ出た。仏陀はこの願ひを許した。比丘となったジョティカはすぐに阿羅漢果を得た。ある日、比丘たちが集まりジョティカ長老に、「友よ、出家する前の豪邸や妻や財産について未練はないか？」と質問した。「いいえ、まったく執着しておりません。何故ならば、私は阿羅漢果を得たからです」と彼は答えた。しかし、この言葉を信じない一部の比丘たちはジョティカ長老が嘘をついたと仏陀に訴えた。仏陀は、「比丘たちよ、私の息子ジョティカは真実を語っている。彼は実に阿羅漢である」と語られ、「この世において自己の渴愛を捨て去り、出家し比丘としての遍歴の旅を続け、生存に対する渴愛を根絶した彼を、私は婆羅門（＝阿羅漢）と呼ぶ」と説かれたのである。

（原註）父王ビンビサーラを殺したため無間地獄に墮ちる因を作ったアジャータサット王子は、仏陀に深く帰依して自ら善行をよく積み重ねた。そのためすでに機会を得ていた不善業の異熟の勢力が削がれていき、さらに悪の異熟が持続しないようにと妨害する善の妨害業（*upaplikakamma*）が働き、死後、アジャータサット王子は無間地獄ではなく、それに付属する小地獄に墮ちることができたと説く。<sup>(64)</sup>

四諦の真理に目覚め、八正道を實踐する……佛教の教えは、渴愛と傲慢を除いた者こそが、阿羅漢果を得られるのである。この偈頌に象徴されることは、バラモン像を、バラモンの家の出身であることという血統主義から、その人の人格、ないしは修行の成果を主とする実績主義もしくは人物本位主義に転換したことにある。四諦の真理の悟りと、八正道の實踐こそが婆羅門の要件であると転換したことである。付随する逸話は、財物へのこだわりにとらわれている者と財物へのこだわりを捨て去った人物との対比を描き出し、財物への執着を取り去った者こそが、佛の教えを悟り、実践する阿羅漢として描き出されているのである。

最後に「シンガラーへの教え」と題される在家者への教えを記して結論としたい。

一 このようにわたくしは聞いた。

あるとき世尊は王舎城のカランダカ竹林（＝竹林精舎）<sup>[P]</sup>Veluvana Kalandakanivāpa <sup>[S]</sup>Venuvana Kalandakanivāpa <sup>[S]</sup>Venuvana-vihāra 中インドのマガダ国の首都に建てられた最初の仏教寺院。〈迦蘭陀（からんだ）竹園〉〈迦蘭陀竹林精舎〉とも音写される。釈尊と僧団のためにカランダカ長者が奉献した竹林に、マガダの国王ビンビサーラ）が伽藍を建立した。祇園精舎・大林精舎・菴羅樹園精舎・靈鷲精舎などとともに釈尊がしばしば滞在し説法した精舎の一つに住んでおられた。そのとき資産者の子シンガラーは早く起床し王舎城を出て「郊外

に至り、沐浴して」衣を淨め、髪を淨めて、合掌し、東方・南方・西方・北方・下方・上方の各方角を礼拝した。

二 そのとき世尊は早朝に內衣をつけ、鉢と衣とを取り、行乞のため王舎城に入られた。そこで世尊は、資産者の子シンガーラが早く起床し、王舎城を出て、「郊外に至り、沐浴して」衣を淨め、髪を淨めて、合掌し、東方・南方・西方・北方・下方・上方のそれぞれの方角を礼拝しているのを見られた。そうして資産者の子・シンガーラを見て、このように問われた。

「資産者の子よ。汝が早く起床し、王舎城を出て、「郊外に至り、沐浴して」衣を淨め、髪を淨めて、合掌し、東方・南方・西方・北方・下方・上方のそれぞれの方角を礼拝するのは何故であるか？」

「尊者よ、父が亡くなるときにわたくしに遺言しました——『親愛なる者よ、お前はもろもろの方角を拝すべきである』と。こういうわけで、わたくしは父の遺言を尊び、敬い、重んじ、奉じて、早く起床して、王舎城を出て、「郊外に至り、沐浴して」衣を淨め、髪を淨めて、合掌し、東方・南方・西方・北方・下方・上方のそれぞれの方角を礼拝するのです。」

「資産者の子よ。立派な律においては、六つの方角をこのようなしかたで礼拝してはならない。」

「そこでシンガーラは乞うた。」「それでは立派な人の律においては、どのようなしかたで六つの方角を礼拝すべきであるか、そのきまりをわたくしによく教えてくださいませ。」

「では、資産者の子よ。聞け。よく注意せよ。わたくしは話してあげよう。」

「尊者よ。かしこまりました」と言つて、資産者の子シンガーラは世尊に答えた。そこで世尊は次のように説かれた。

三 「資産者の子よ。立派な弟子が四つの行為の汚れを捨て、四つのしかたで悪い行為をなさず、また財を散ずる六つの門戸になずまなければ、かれはこのようにして十四の罪悪から離脱し、六つの方角を護る。かれはこの世およびかの世にうち勝つために実践しているのであり、この世とかの世とはかれに征服されている。かれは肉体が滅びたのち、死後に、良いところ、天の世界に生まれる。

では、かれの捨て去った四つの行為の汚れとは何であるか？資産者の子よ、いきものを殺すこと、与えられないものを取ること、欲望に關する邪な行ない、虚言、——は、行為の汚れである。

これらの四つの行為の汚れを、かれは捨て去っているのである」と。

世尊はこのように説かれた。

四 幸ある人、師（＝釈尊）はこのように説いたあとで、さらにまた次のように言った、――

殺生と盗みと虚言といわれるものと

他人の妻に近づくこととを

聖者は称賛しない

五 「いかなる四つのしかたによつて人は悪い行ないをしないのであるか？貪欲により、怒りにより、迷いにより、恐怖によつて非道を行くことがない。それが故に、人は悪い行ないをなすのである。それ故に立派な弟子は、決して、貪欲により、怒りにより、迷いにより、恐怖によつて非道に行くことがない。

これらの四つのしかたによつて、かれは悪い行ないをしないのである」と。

このことを世尊は説かれた。

六 幸ある人、師はこのように説いたあとで、さらにまた次のように言われた、

貪欲と奴りと恐怖と愚迷とによつて

法を犯す者はみな

あたかも黒分（月が欠けていく半ヵ月）における月が「欠けて暗くなる」ように

彼の名声は減退する

しかし貪欲と怒りと恐怖と愚迷とによつて

法を犯さない者はみな

あたかも自分における月のごとく

彼の名声はみち増大する

七 人の近づいてはならぬところの、財を散ずる六つの門戸とは何であるか？



〔1〕酒類など怠惰の原因に熱中することは、実に資産家の子よ、財を散ずる門戸である。

〔2〕時ならぬのに街路を遊歩することに熱中するのは、財を散ずる門戸である。

〔3〕〔祭礼舞踏など〕見せものの集會に熱中するのは、財を散ずる門戸である。

〔4〕賭博という遊惰の原因に熱中するのは、財を散ずる門戸である。

〔5〕悪友に熱中するのは、財を散ずる門戸である。

〔6〕怠惰にふけることは、財を散ずる門戸である。

八 酒類など怠惰の原因に熱中するならば、次の六つのあやまちが生ずる。すなわち〔1〕現に財の損失あり、〔2〕口論を増し、〔3〕疾病の巢窟となり、〔4〕悪い評判を生じ、〔5〕陰処をあらわし、〔6〕第六の原因として智力を弱からしめる。これらの六つのあやまちは、酒類など怠惰の原因に熱中するときに生じる。

九 時ならぬのに街路を遊び歩くことに熱中するならば、次の六つのあやまちが生ずる。すなわち〔1〕かれ自身も護られておらず、防衛されていない。〔2〕かれの子も、妻も、また護られておらず、防衛されていない。〔3〕かれの財産もまた護られておらず、防衛されていない（盗賊に狙われる）。〔4〕また悪事に関して疑われる。〔5〕不実の噂がかれに起こる。〔6〕多くの厄介なことがらがつづいて起る。これらの六つのあやまちは、時ならぬのに街路を遊び歩くことに熱中するときに起る。

十 〔祭礼舞踊など〕見せものの集會に熱中するならば、実に次の六つのあやまちが起る。すなわち、〔1〕どこに舞踊があるか、〔2〕どこに歌があるか、〔3〕どこに音楽があるか、〔4〕どこに講談があるか、〔5〕どこに手楽があるか、〔6〕どこに陶器楽があるか」とたずねる。実にこれらの六つのあやまちは、見せものの集會に出かけることに熱中するときに起る。

十一 賭博という遊惰の原因に熱中するならば、実に次の六つのあやまちが生ずる。すなわち、〔1〕勝ったならば、相手が敵意を生じ、〔2〕負けたならば心に悲しみ、〔3〕現に財の損失あり、〔4〕法廷に入ってもかれのことは信用されず、〔5〕友人同輩からは軽侮され、〔6〕婚姻せしめる人々からは拒絶され、賭博漢は妻をもつ資格がないといわれる。実にこれらの六つのあやまちは、賭博という遊惰の原因に熱中するときに起る。

十二 悪友になじむならば、次の六つのあやまちが生ずる。すなわち、「1」ばくち打ち、「2」乱行者、「3」飲んだくれ、「4」いかさま師、「5」詐欺漢、「6」乱暴者、——これらはかれの友人であり、かれの仲間であるということになる。

実にこれらの六つのあやまちは、悪友に交わるときに起る。

十三 怠惰にふけるならば、実にこれらの六種のあやまちが起るのである。「1」『寒すぎる』といって仕事をなさず、「2」『暑すぎる』といって仕事をなさず、「3」『晚すぎる』といって仕事をなさず、「4」『早すぎる』といって仕事をなさず、「5」『わたくしははだしく飢えている』といって仕事をなさず、「6」『わたくしははだしく腹がふくれている』といって仕事をなさない。かれはこのようになすべき仕事に多くの口実を設けているので、いまだ生じない富は生じないし、またすでに生じた富は消滅に向かうのである。資産者の子よ。実にこれらの六つのあやまちは、怠惰にふけるがゆえに起るのである」と。

世尊はこのように説かれた。

十四 幸ある人、師はこのように説かれたあとで、さらにまた次のように言われた、

「飲み友だちなるものがある。きみよ、きみよ、と呼びかける親友である（と自称する。）」

しかし事が生じたときに味方となってくれる人こそ友なのである。

〔1〕太陽が昇ったあとでも寢床にあり

〔2〕他人の妻になれ近づき

〔3〕闘争にふけり

〔4〕無益なことに熱中し

〔5〕また悪友（と交わり）

〔6〕また非常にものおしみし強欲なこと——

これら六つのことがらは、人を破滅に導く。

悪友と悪い仲間と

悪い行いになずむ人とは

この世とかの世とにおいて

破滅におもむく

〔1〕 骰子（さい）と女、酒、〔2〕 舞踏と歌

〔3〕 白昼の睡眠、〔4〕 非時に街を遊び歩くこと

〔5〕 悪友（と交わり）、〔6〕 ものおしみて強欲なこと――

これら六つのことがらは人を破滅に至らしめる。

骰子を遊び、酒を飲み、他人にとって生命にも等しい妻女に通い  
卑しいものと交わり、経験ある人に交わらないならば

黒分における月のように欠けて行く

財なく無一物なのに

酒が飲みたくて、酒場に行つて飲む呑んだくれは

水に沈むように負債に沈み

すみやかにおのが家門を滅ぼすであろう

白昼に眠るのを常とし

夜は起きるものと思い

常に泥酔にふける者は

家を確立することができない

寒すぎる、暑すぎる、遅すぎる、と言つて

このように仕事を放擲するならば

利益は若者から去って行くだろう

人としての義務をなす者は

幸福を逸することがない

十五 次の四種は敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。すなわち〔1〕何ものでも取って行く人、〔2〕ことばだけの人、〔3〕甘言を語る人、〔4〕遊蕩の仲間が敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。

十六 何ものでも取って行く人は、次の四つのしかたによつて、敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは〔1〕何でも〔品物を扱はず〕取って行く。〔2〕僅かの物を与えて多くの物を得ようと願う。〔3〕ただ恐怖のために義務をなす。〔4〕自分の〔利益のみを追求する。何ものでも取って行く人は、これらの四つのしかたによつて、敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。〕

十七 『ことばだけの人』は、次の四つのしかたによつて、敵であつて友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、〔1〕過去のことに関して友情をよそおい、〔2〕未来のことに関して友情をよそおい、〔3〕無益のことを言つて取りいり、〔4〕なすべきことが眼前に迫ると、都合が悪いということを示す。実に『ことばだけの人』は、これらの四つのしかたによつて、実は敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。

十八 実に、『甘言を語る人』は、次の四つのしかたによつて、敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、〔1〕相手の悪事に関して同意し、〔2〕善事に同意しない。〔3〕その人の面前では賛美し、〔4〕その背後ではその人をそしる。

『甘言を語る人』は、これらの四つのしかたによつて、実は敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。

十九 実に、遊蕩の仲間は、次の四つのしかたによつて、敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、〔1〕もろもろの酒類など怠惰の原因に耽るときは仲間である。〔2〕時ならぬのに街路をぶらつき廻るときは仲間である。〔3〕〔祭礼舞踊などの〕集会に入りこむときの仲間である。〔4〕賭博など遊惰なことがらに耽るときは仲間である。

これらの四つのしかたによつて、遊蕩の仲間は実は敵であつて、友に似たものにすぎない、と知るべきである、と。」

このように世尊は説かれたのである。

二〇 幸ある人、師（＝釈尊）はこのことを説き了えてから、次にこのように説かれた、何でも取ってゆく友

ことばだけの友

甘言を語る友

遊蕩の友

これらの四つは敵である、と賢者は知って、かれらを遠く避けよかし。

あたかも恐ろしい道を避けるように。

二一 これらの四種類の友人は親友（心のこもった友）であると知るべきである。すなわち、「1」助けてくれる友、「2」苦しいときも楽しいときも一緒に友である人、「3」ためを思っ話してくれる友、「4」同情してくれる友は親友であると知るべきである。

二二 『助けてくれる友』は、次の四つのしかたによって親友であると知るべきである。かれは、「1」友が無気力なときに、まもってくれる。「2」友が無気力なときに、その財産をまもってくれる、

「3」友が恐れおののいているときに、その庇護者となってくれる。「4」なすべきことが起ったときに、必要とする二倍の財を給してくれる。

『助けてくれる友』は、これら四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。

二三 『苦しいときにも楽しい時にも一様である友』は、次の四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。その友は、「1」かれ（相手）に秘密を告げてくれる。「2」かれの秘密をまもってくれる。「3」困窮に陥ったときにも、かれを捨てない。「4」かれのためには生命をも棄てる。

『苦しいときにも楽しいときにも一様である友』はこれらの四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。

二四 実に『ためを思っ話してくれる友』は、次の四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。

かれは、「1」悪を防止し、「2」善に入らしめ、「3」未だ聞かないことを聞かせてくれ、「4」天に至る道を説いてくれる。『ため  
を思つて話してくれる友』は、実にこれらの四つのしかたによつて親友である、と知るべきである。

二五 実に『同情してくれる友』は、次の四つのしかたによつて、親友である、と知るべきである。

かれは、「1」その人の衰微を喜ばない。「2」その人の繁栄を喜び、「3」他の人がかれをそしめるのを弁護してくれ、「4」他の人が  
その人を称讃するのを説きひろめる。実に『同情してくれる友』は、これらの四つのしかたによつて、親友である、と知るべきであ  
る。

このように世尊は説かれた。

二六 幸ある人、師（釈尊）はこのように説いたあとで、また次のように説かれた。――

助けてくれる友と

苦しいときにも楽しいときにも友人である人と

ためを思つて話してくれる友と

同情してくれる友と――

実にこれらの四種が友である、賢者は知つて

真心をこめて、かれらに尽くせかし――

あたかも母がおのが子をいつくしむように

戒めをたもっている賢者は

〔山頂に〕燃える火のように輝く

峰が食物を集めるように働くならば

〔かれの〕財産はおのずから集積する

あたかも蟻の塚のたかめられるようなものである

このように財を集めては

かれは家族に実によく利益をもたらす家長となる

その財を四分すべし。〔そうすれば〕かれは実に朋友を結束する。

一分の財をみずから享有すべし。

四分の二の財をもつて〔農耕・商業などの〕仕事を営むべし

また〔残りの〕第四分を蓄積すべし

しからは窮乏の備えとなるであらう

二七 資産者の子よ、立派な弟子は六つの方角をどのように護るのであるか？六つの方角とは次のものであると知るべきである。

東方は父母であると知るべきである。南方はもろもろの師であると知るべきである。西方は妻であると知るべきである。北方は友人・朋輩であると知るべきである。下方は奴僕・傭人であると知るべきである。上方は修行者・バラモンたちであると知るべきである。

二八 実に次の五つのしかたによって、子は、東方に相当する父母に対して奉仕すべきである。――

『われは両親に養われたから、かれらを養うおう。かれらのために為すべきことをしよう。家系を存続しよう。財産相続しよう。そうしてまた祖霊に対して適当な時々供物を捧げよう』と。

実にこれらの五つのしかたによって子は、東方に相当する父母に対して奉仕すべきである。

また父母は次の五つのしかたで子を愛するのである。すなわち〔1〕悪から遠ざけ、〔2〕善に入らしめ、〔3〕技能を習学させ、〔4〕適当な妻を迎え、〔5〕適当な時期に相続をさせる。

実に子は、このような五つのしかたによって、子は、東方に相当する父母に奉仕し、また父母はこれらの五つのしかたによって子を愛するのである。このようにしたならば、かれの東方は護られ、安全であり、心配がない。

二九 実に弟子は次の五つのしかたで、南方に相当する師に奉仕すべきである。すなわち、〔1〕座席から立って礼をする。〔2〕近くに侍



する。〔3〕熱心に聞くこととする。〔4〕給仕する。〔5〕うやうやしい態度で学芸を受ける。

実にこれらの五つのしかたによって弟子は、南方に相当する師に対して奉仕すべきである。

また師は次の五つしかたで弟子を愛する。すなわち、〔1〕善く訓育し指導する。〔2〕善く習得したことを受持させる。（忘れないようにさせる。）〔3〕すべての学芸の知識を説明する。〔4〕友人朋輩の間にかれのことを（長所等を語って）吹聴する。〔5〕諸方において庇護してやる。

実に南方に相当する師は、これらの五つのしかたによって弟子を愛するのである。このようにしたならば、かれの南方は護られ、安全であり、心配がない。

三〇 実に夫は次の五つのしかたで、西方に相当する妻に奉仕すべきである。すなわち、

〔1〕尊敬すること、〔2〕軽蔑しないこと、〔3〕道を踏みはずさないこと、〔4〕権威を与えること、〔5〕装飾品を提供することによってである。

西方に相当する妻はこれらの五つのしかたによって夫から奉仕されるのである。

また妻は次の五つのしかたで夫を愛する。すなわち妻は、

〔1〕仕事を善く処理し、〔2〕眷属を良く待遇し、〔3〕道を踏みはずすことなく、〔4〕集めた財を保護し、〔5〕為すべきすべてのことがらについて巧妙にして且つ勤勉である。

西方に相当する妻は、これらの五つのしかたによって夫から奉仕され、またこれらの五つのしかたで夫を愛するのである。このようにしてかれの西方は護られ、安全で、心配がない。

三一 実に良家の子は次の五つのしかたで、北方に相当する友人・朋輩に奉仕する。すなわち、〔1〕施与と、〔2〕親しみあるやさしいことば（愛語）と、〔3〕ひとのためにつくすこと（利行）と、〔4〕協同することと、〔5〕欺かないこととによってである。これら五つのしかたによって、良家の子は、北方に相当する友人・朋輩に対して奉仕する。また友人・朋輩は次の五つのしかたによって良家の子を愛する。すなわち、かれが無気力なときに、まもってくれる。無気力なときに、その財産をまもってくれる。恐れおのの

ているときに、庇護者となってくれる。逆境に陥ってもかれを捨てない。かれののちの子孫をも尊重する。

実にこれらの五つのしかたによって、良家の子は、北方に相当する友人・朋輩に対して奉仕する。また友人・朋輩は次の五つのしかたによって良家の子を愛する。このようにして、かれの北方は護られ、安全であり、心配がない。

三二 実に主人は次の五つのしかたで、下方に相当する奴僕傭人に奉仕しなければならぬ。すなわち〔1〕その能力に応じて仕事をあてがう、〔2〕食物と給料とを給与する、〔3〕病時に看病する、

〔4〕すばらしい珍味の食物をわかち与える、〔5〕適当なときに休息させるところによってである。

実にこれらの五つのしかたによって主人は、下方に相当する奴僕傭人に対して奉仕するのである。

また、奴僕・傭人は次の五つのしかたで主人を愛しなければならぬ。すなわちかれらは〔1〕「主人よりも」朝早く起き、〔2〕のちに寝に就き、〔3〕与えられたもののみを受け、〔4〕その仕事をよく為し、〔5〕「主人の」名譽と称讃とを吹聴する。実にこれらの五つのしかたによって立派な主人は、下方に相当する奴僕傭人に奉仕する。また奴僕傭人はこれらの五つのしかたによって立派な主人を愛するのである。このようにしてかれの下方は護られ、安全で、心配がない。

三三 実に、良家の子は次の五つのことがらによって、上方に相当する修行者 (*Pśamana* *Sīramāṇa*) とバラモンとに奉仕すべきである。

〔1〕親切な身体の行為、〔2〕親切な口の行為 (＝ことば)、〔3〕親切な心の行為 (＝思い)、〔4〕門戸を開きさぬこと、〔5〕財物を給与することによってである。

実にこれらの五つのしかたによって良家の子は、上方に相当する修行者とバラモンとに奉仕するのである。また修行者とバラモンとは次の六つのしかたによって良家の子をば愛するのである。

すなわち、〔1〕悪から遠ざからしめ、〔2〕善に入らしめ、〔3〕善い心をもって愛し、〔4〕いまだ聞かないことを聞かしめ、〔5〕すでに聞いたことがらを純正ならしめ、〔6〕天への道を説き示す。実にこれらの五つのしかたによって、上方に相当する修行者とバラモンとは良家によって奉仕され、また修行者とバラモンとはこれらの六つのしかたによって良家の子を愛するのである。このようにしてかれの上方は護られ、安全であり、心配がない。

世尊はこのように説かれた。

三四 幸ある人、師は、このように説いたあとで、次のように説いた、――

父母は東方である

師は南方である

妻子は西方である

友人・朋輩は北方である

奴僕・傭人は下方である

修行者・バラモンは上方である

一族の中で有能な家長は、これらの方角を拝すべきである

学識あり、戒めを身にそなえ

柔和で、才智あり、謙譲で、ひかえめな人――

かくのごとき人は名声を得る

勇敢で怠ることなく

逆境に陥つてもたじろがず

かくのごとき人は名声を得る

人々をよくまとめ、友をつくり

寛大で、もの惜しみせず

導き者、指導者、順応して導く人

かくのごとき人は名声を得る

施与と、親愛のことばを語ることと

この世で人のためにつくすこと

あれこれの事柄について適当に協同すること――

これらが世の中における愛護である。あたかも回転する車のくさびのごとくである

もしも右の四つの愛護を行わないならば

母も父も、母たり父たるが故に子から受けるべき尊敬も扶養も得られぬのであろう

もろもろの賢者はこれらの愛護をよく観察するが故に

かれは偉大となり

称賛を博するに至るである

三五 このように説かれたときに、資産者の子シンガーラは世尊に向かって次のように言った、

「みごとです、尊師よ。みごとです、尊師よ。あたかも倒れたものを起し、あるいは隠されたものを顕わし、あるいは迷える者に道を示し、あるいは『眼ある者は色を見るであらう』と言って闇黒の中に油の燈火をかけるように、そのように世尊は種々のしかたで法を説き示されました。尊師よ。わたくしは世尊に帰依し、また法とビクのつどいとに帰依しまつる。願わくは、世尊がわたくしを、今日より以後、いのちある限り、帰依する信徒として受けたまえ」と。

〈シンガーラに対する教え〉という經典終る。

長文の引用となったが、ここには「（1）悪から遠ざけ、（2）善に入らしめ、（3）技能を習学させ、（4）適当な妻を迎え、（5）適当な時期に相続をさせる。」と家庭の存続を前提とする妻を娶り、適時に相続させることばかりでなく、「諸悪莫作 諸善奉行 自浄其意 是諸佛教」との「七佛通誡偈」を踏まえ、更に「夫と妻の愛情について言及していることであり、妻が家事を司ることに専念する当時の家庭生活にあって、夫の愛が（1）尊敬すること、（2）軽蔑しないこと、（3）道を踏みはずさないこと、（4）權威を与えること、（5）装飾品を提供することによってである。

西方に相当する妻はこれらの五つのしかたによって夫から奉仕されるのである。

また妻は次の五つのしかたで夫を愛する。すなわち妻は（１）仕事を善く処理し、（２）親族を良く待遇し、（３）道を踏みはずすことなく、（４）集めた財を保護し、（５）為すべきすべてのことについて巧妙にして且つ勤勉である。

西方に相当する妻は、これらの五つのしかたによって夫から奉仕され、またこれらの五つのしかたで夫を愛するのである。このようにしてかれの西方は護られ、安全で、心配がない。」と一方的に妻にのみ従順を強いるものではないことである、妻への装飾品の提供は、戦争・気候不順等に備えて、価値の比較的安定しているコイン・装飾品の贈与で非常時に妻を困らせないことに夫は努めるべきであり、財の保管を妻に委ねるのである。家庭を大事にし、女性を差別しない原始仏教の姿が垣間見られるのである。

#### 註

- （１）たとえば、小学館「スーパーニッポンニカ」の仏教の項目
- （２）中村元著「比較思想論」2頁以下
- （３）中村元著「インド人の思维方法」39頁以下
- （４）中村元著「シナ人の思维方法」23頁以下
- （５）中村元著「チベット人・韓国人の思维方法」242頁以下
- （６）中村元著「チベット人・韓国人の思维方法」43頁以下
- （７）中村元著「日本人の思维方法」13頁以下
- （８）中村元著「中国人の思维方法」13頁以下及び吉川幸次郎全集一に所収の「中国文学の性質」、「中国文学の政治性」、「東方における人と歴史の概念」、「中国の文学とその社会」吉川幸次郎全集二所収の「中国文章論」、「漢文の話」、「支那人の古典とその生活」、「中国の読書人」、「中国の知識人」など、さらに世界百科事典（平凡社）の「中国語」の項目を参照した。なお、お茶の水女子大学の初男性の人文科学博士の学位を取得した植木雅俊はその著『仏教のなかの男女観』（博士論文）で、バリー語、サンスクリット語で書かれた原始仏典の徹底的な読み込みを通して、釈尊の教えが、バラモン教的な人間観を批判するなかから生まれ、本来、積極的に女性の宗教的救済を認める方向性をもっていたこと、真理への覚醒が誰に対しても開かれているとする平等主義の立場に立っていたことを明らかにした。植木氏は、本学で開催された国際シンポジウム『Translation/Comparing Poetry』に参加され、『仏教のジェンダー平等思想』——インド・中国・日本の比較——（大手前大学比較文化研究叢書8『比較詩学と文化の翻訳』所収）を発表されている。平等思想を説く、世尊の思想は、インドでは、バラモン教、中国では儒教・道教の思想によって排除され、歪められ、法華経の『女人成仏』（變成男子）の思想となることを解明されてきた。経典の中の詩である偈頌に言及されて

いないことは残念である。

- (9) 中村元著「ゴータマ・ブッダー」774頁 なお、中勘介は小説『提婆達多』をものしているが、その前篇では佛傳に依拠しながら、耶輪陀羅をめぐって、悉達多と提婆達多との間の公開武芸会での、武芸に勝れる提婆達多の悉達多への配慮と自負から、三番勝負で、一番は取って勝を譲り、二番目は難なく勝ち、そして三番目は一瞬の傲りで、氣迫迫る悉達多の「突き」に虚を突かれて、勝負を落としてしまう。提婆達多の悉達多への尊崇の念と、耶輪陀羅への想いの念とが交錯する様子を見事に描き出している。後篇は、佛弟子となった提婆達多の、「法の世界」での提婆達多の自惚れからの「教団改革」(新しい戒の設定)を提起し、老齢の世尊に禪定を求めるが、挿げなく拒否され、阿闍多設咄路を唆して頻毗婆羅王を幽閉して、摩伽陀の王となる逸話、世尊を何度か殺害しようと試みたが、失敗に帰した逸話などを、挿入しているが、父王を死に追い込んだ阿闍多設咄路の、佛陀への帰依を聞き、悔い、世尊への告別の途上、自恣の潰え果てようとするとき、極度の衰弱と疲労と高熱の中で水を求めながらその一生を終えた。提婆達多にも救いがあるとしてこの小説は終わっている。中の『提婆達多』は、多くの佛典に通じ(漢訳の佛典であるが)、一部に「伏せ字」をも含んでいるが、このことは、大正十年(1921年)当時の碩学の佛敎理解を示すものである。また、岩波文庫版の巻末には、刊行直後の和辻哲郎の書評が付けられている。漢訳佛典の産物ではあるが、当時のインドの社会を刻銘に描きまた、悉達多と提婆達多、提婆達多と耶輪陀羅との間の心情の交流と葛藤を巧みに描き出している。

- (10) 法顯三蔵の『高僧法顯伝』は、当時、「舍衛城にはデーヴァダッタの敎えを信奉する人々がいて、過去三仏を供養していたが、釈迦仏は供養していなかった」と伝えています。また、さきにあげた七世紀の玄奘三蔵の『大唐西域記』は、「デーヴァダッタの遺訓を遵奉する者たちが三つの伽藍に住んでいて、乳酪を飲食しなかった」と伝えている。

- (11) 『四部律』第四六卷、破僧健度第一五(大正新脩大藏經 二二卷 909頁中)

- (12) 中村元著『原始仏敎の成立』541頁〜542頁『十誦律』第三六卷、雜誦第一(大正新脩大藏經 二二卷 259頁上〜中)

- (13) 中村元著『原始仏敎の成立』542頁

- (14) Burlingame Eugene Watson "Buddhist Legends" vol.1 pp189〜193 逸話の要約は、ウ・ヴィジャーナタ大長老監修 北嶋泰観訳註編集「パリー語仏典『タンマパダ』に依った。(以下同様) 13〜14頁

- (15) 二つの偈頌は漢訳の「法句經」では、不吐毒態 欲心馳騁 未能自調 不應法衣(9)  
「能吐毒態 戒意安靜 降心已調 此應法衣」(10)とされ、代表的な日本語訳では、中村元訳は

「けがれた汚物を除いていないのに、黄褐色の法衣をまとうと欲する人は、自制が無く真実も無いのであるから、黄褐色の法衣にふさわしくない」(9)

「けがれた汚物を除いていて、戒律をまもることに専念している人は、自制と真実とをそなえているから、黄褐色の法衣をまとうのにふさわしい」(10)

友松圓諦訳は

「心なお、けがれを去らず



ただ袈裟衣（きいろき）をまとわんとす  
されど、心ととのわず

業（わざ）、真理（まこと）にそわずば

袈裟（きいろき）を身にまとわんに

彼はげにそのあたえあらず（9）

「心すでにけがれを去り

心よくいましめに住し

自らおのれをととのえ

業（わざ）、真理（まこと）にそわば

袈裟（きいろき）をまとわんに

彼こそは

げにそのあたえあり」（10）

片山一良訳は

「汚れを除き去らずして

袈裟（けさ）の衣をまとうと

調御（じょうご）と真理にほど遠い

かれは袈裟に値せず」（9）

「しかし汚れを除き去り

もろもろの戒に安定し

調御と真理をそなえたる

かれこそ袈裟に値する」（10）

（16）Burlingame Eugene Watson "Buddhist Legends" vol.1 pp189-193 逸話の要約は、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観訳註編集「パー

リ語仏典『ダンマパダ』に依った。（以下同様）

（17）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観訳註編集 前掲書 14頁

（18）友松圓諦『法句経講義』 311-312頁

（19）この偈頌の漢訳は

「造憂後憂 行惡兩憂 彼憂惟懼 見罪心位」であり、対句は

「造喜後喜 行善兩喜 彼喜惟歡 見福心安」である。

中村元訳は

「悪いことをなす者は、この世で悔いに悩み、来世でも悔いに悩み、ふたつのところで悔いに悩む。『わたくしは悪いことをしました』という悔いに悩み、苦難のところ（地獄など）におもむいて（罪のむくいを受けて）さらに悩む。」

友松圓諦訳は

「あしきを作（な）す者は

いまにくるしみ

のちにくるしみ

ふたつながらにくるしむ

「あしきをわれなせり」と

かく思いてくるしむ

かくて

なやましき行路（みち）を歩めば

いよいよ心くるしむなり」

片山一良訳は

「悪行の者はこの世で苦しむ

あの世で苦しむ、兩世で苦しむ

『私は悪をなした』と苦しむ

悪道に行き、さらに苦しむ」

(20) "Buddhist Legends" vol.1. pp230～242

(21) 『歎異抄』 45頁

(22) 『歎異抄』 45～46頁

(23) 『歎異抄』 71～72頁

(24) 『観無量壽經』 大正新脩大藏經 第十二卷三四六頁 上 引用は中村元・早島鏡正・紀野一義訳註の『浄土三部經』所収のものから引用した

(25) 法然 『選択本願念仏集』で、「下品上生は、十惡の罪人なり。臨終の一念に罪滅して生ずることを得。下品中生は、これ破戒の罪人なり。臨終

に佛の依正の功德を生ずることを得。下品下生は、これ五逆の罪人なり。臨終の十念に、罪滅して生ずることを得。この三品は尋常の時、ただ

惡業を造つて往生を求めずといへども、臨終の時、始めて善知識に遇うて即ち往生を得。」147頁（日本思想体系 10 『法然・一遍』所収）

法然は「惡人正機」を唱え、親鸞が師の説を継承・發展させたものである。

(26) 漢訳の『法句經』の「羅漢品」では

「去離憂患 脫於一切 縛結一切 冷而無煖 心淨得念 無所貪樂」

中村元訳では

「すでに（人生の）旅路を終え、憂いをはなれ、あらゆることごとくにくつろいで、あらゆる束縛の絆（きずな）をのがれた人には、悩みは存在しない」

友松圓諦訳では

「経（ふ）べき道を

過ぎおえ

うれいなく

一切（すべて）において解脱（げだつ）をえ

ありとある纏結（まつわり）を

断ちきれる人に

熱惱（くるしみ）あることなし」

片山一良訳は

「旅路を終えて憂いなく

あらゆるものから解脱（げだつ）して

束縛すべてを断つ者に

苦しみ悩みは見られない」

(27) Burlingame Eugene Watson "Buddhist Legends" vol.2. pp197～198 註記についてはウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観訳註編集 前

掲書 121頁によった。

漢訳の『法句經』の「愛身品」では

「人不持戒 滋蔓如藤 淫情極欲 惡行日増」

中村元訳では

「極（きわ）めて性（たち）の悪い人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自分に対してなす。――蔓草が沙羅（しゃら）の木にまと

いつくように」

友松圓諦訳では

「ひと おのれに

いささかの戒（つつしみ）なければ

ただかも 敵者（かたき）の

ダンマパダと教育(五)

- ( 70 )

- (44) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 475 頁下
- (45) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 476 頁上、中
- (46) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 476 頁下
- (47) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 477 頁中
- (48) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 477 頁中
- (49) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 477 頁下
- (50) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 444 頁下、478 頁上
- (51) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 478 頁上
- (52) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 480 頁下
- (53) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 480 頁下、481 頁上
- (54) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 484 頁下
- (55) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 485 頁中
- (56) 『大般涅槃經』 (374) (大正新脩大藏經 卷十二) 485 頁中
- (57) 田上太秀著『涅槃經を読む』 69 頁、70 頁 なお、gamma の訳語については、荻原雲来編纂の『梵和大辞典』、水野弘元著『パーリ語辞典』の該当項目の訳を用いた。
- (58) 漢訳『法句經』の「沙門品」では
- 「學無求利 滋蔓如藤 比丘好他 不得定意」であり、
- 中村元訳では
- 「托鉢によつて 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。」
- 友松圓諦訳では
- 「おのれの
- 得るところを
- 軽んずるなかれ
- しかして
- 他（ひと）をうらやまざれ
- 他をうらやむ比丘は
- 三昧（やすけさ）をうることなし」
- 片山一良訳は

(59)

「自分の利得を蔑（さげす）むなかれ  
他人のものを羨（うらや）むなかれ  
他人のものを羨む比丘は  
禪定（ぜんじょう）を得ることがない」

漢訳『法句經』の「沙門品」では

「比丘少取 以得無積 天人所量 生淨無穢」であり

中村元訳では

「たとい得たものが少なくても、修行僧が自分で得たものを軽んずることが無いならば、怠ることなく清く生きるその人を、神々も称讃する。」

友松圓諦訳では

「得るところ少なきも

比丘（みちをもとむるもの）

そのうるところを

軽んぜずば

淨（きよ）く生き

おこたりなき彼を

諸々（もろもろ）の神すらも

讃（たた）うるなり」

片山一良訳では

「たとえ利得がわずかでも

自分の利得を蔑まず

生活清く、怠りのない

比丘を諸天は称讃す」

(60)

Burtingane Eugene Watson "Buddhist Legends" vol.3. p.251

(61)

諸橋轍次『大漢和辞典』による（広辞苑では「交朱則赤、交墨則黒」とされている）

(62)

貧しい生活の中から供養する一燈は、富んだ者の万燈にもまさった功德があること。アジャータサトウー王の献じた万燈は風に消えたり、油が  
つきてなくなったが、一老婆の献じた一燈は消えなかった、という説話が、『阿闍世王受結経』に出ている。（中村元著『佛教語大辞典』古く  
は「貧女の一燈」と言った。『阿闍世王受結経』や『賢愚経』に、信心深い貧しい女が佛に供養した国王や富者の万燈にまさった、という話に

(63)

基づいた句で、貧者の真心からでたわずかな寄進、またそれが極めて貴重であることの喩えとする。『岩波仏教辞典 第二版』『阿闍世王受結經』

漢訳『法句經』の「梵志品」では

「已斷恩愛 離家無欲 愛有已盡 是謂梵志」であり

中村元訳では

「この世の愛執を断ち切り、出家して遍歴し、愛執の生存の尽きた人、——かれをわれは〈バラモン〉と呼ぶ。」

友松圓諦訳では、

「この世にて

愛欲を去り

家なくして

遊行（ゆぎょう）し

愛欲を尽（つく）せるもの

われかかる人を

婆羅門とよばん」

片山一良訳は

「この世で渴愛を断ち切って

家を離れて遊行し

渴愛、生存を尽くしている者

かれを私はバラモンと呼ぶ」

(64) (65)

Burlingame Eugene Watson "Buddhist Legends" vol.3. pp313-331

「シンガウラへの教え」——善生經——中村元訳（春秋社・原始仏典第三巻より）なお、この經典は南伝大藏經8 長部經典3に「教授尸迦羅越經」（神林隆淨譯）180-193頁があり、大正新脩大藏經には『長阿含經』の卷第一一の「善生經」（大正新脩大藏經卷一 七〇-七二頁所収）、『中阿含經』の卷第三三の「善生經」（大正新脩大藏經卷一 六三八-六四二頁 所収）、『佛說尸迦羅越六方禮經』（大正新脩大藏經卷一 二五〇-二五二頁 所収）および「佛說善生子經」（大正新脩大藏經卷一 二五二-二五五頁所収）がある。引用の訳文はhyyp://www14.plala.or.jp/okyou.htmlのものを使用した。

母父という母系制を示唆する表現は、この「シンガウラへの教え」では取られていない。

漢訳の四經はその差異をまよめの偈頌で示しておく。

佛說尸迦羅越六方禮經（016）



雞鳴當早起	被衣來下床	澡漱令心淨	兩手奉花香
佛尊過諸天	鬼神不能當	低頭遶塔寺	叉手禮十方
賢者不精進	譬如樹無根	根斷枝葉落	何時當復連
採華著日中	能有幾時鮮	放心自縱意	命過復何言
人當慮非常	對來無有期	犯過不自覺	命過爲自欺
今當入泥犁	何時有出期	賢者受佛語	持戒慎勿疑
佛如好華樹	無不愛樂者	處處人民聞	一切皆歡喜
令我得佛時	願使如法王	過度諸生死	無不解脫者
戒德可恃怙	福報常隨己	現法爲人長	終遠三惡道
戒愼除恐畏	福德三界尊	鬼神邪毒害	不犯有戒人
墮俗生世苦	命速如電光	老病死時至	對來無豪強
無親可恃怙	無處可隱藏	天福尚有盡	人命豈久長
父母家室居	譬如寄客人	宿命壽以盡	捨故當受新
各追所作行	無際如車輪	起滅從罪福	生死十二因
現身避免亂	濟育一切人	慈傷墜衆邪	流沒于深淵
勉進以六度	修行致自然	是故稽首禮	歸命天中天
人身既難得	得人復嗜欲	食姪於意識	痛想無厭足
豫種後世栽	歡喜詣地獄	六情幸完具	何爲自困辱
一切能正心	三世神吉祥	不與八難貪	隨行生十方
所生趣精進	六度爲橋梁	廣勸無極慧	一切蒙神光
佛說善生子經 (017)			
東面爲父母	師教宜南面	西面爲子婦	朋友位北面
奴客執事下	沙門梵志上	如此應爲禮	亦爲居家宜
凡人富有財	當念以利人	與人同財利	布施者昇天
得利與人共	在在獲所安	義攝世間者	斯爲近樂本
夫以恩攝人	如母之爲子	善攝護天下	其福數數及
上得處衆會	能益利與安	成人之信戒	必使得名聞

意與常不惜	捨棄慳吝行	攝人以友事	飲食相惠施
往來而又往	如是名不虧	夫能修慎身	斯居家爲賢
居積寶貨者	當興爲仁義	先學爲最勝	次乃爲治產
若索以得財	當常作四分	一分供衣食	二爲本求利
藏一爲儲貯	厄時可救之	爲農商養牛	畜羊業有四
次五嚴治室	第六可聘娶	如是貨乃積	日日尋益增
夫財日夜聚	如流歸于海	治產求以漸	喻若蜂作蜜
有財無與富	又無與邊方	慳吝及惡業	有力無與友
事中用則學	不用勿自妨	觀夫用事者	明好猶熾火
其於族親中	乃兼爲兩好	與親衆座安	如釋處天宮

善生經（長阿含）

父母爲東方	師長名南方	妻婦爲西方	親族爲北方
僮僕爲下方	沙門爲上方	諸有長者子	禮敬於諸方
敬順不失時	死皆得生天	惠施及軟言	利人多所益
同利等彼己	所有與人共	此四多負荷	任重如車輪
世間無此四	則無有孝養	此法在世間	智者所撰擇
行則獲大果	名稱遠流布	嚴飾於床座	供設上飲食
供給所當得	名稱遠流布	親舊不相遺	示以利益事
上下常和同	於此得善譽	先當習伎藝	然後獲財業
財業既已具	宜當自守護	出財未至奢	當撰擇前人
欺誑猥突者	寧乞未舉與	積財從小起	如蜂集衆花
財寶日滋息	至終無損耗	一食知止足	二修業勿怠
三當先儲積	以擬於空乏	四耕田商賈	澤地而置牧
五當起塔廟	六立僧房舍	在家勤六業	善修勿失時
如是修業者	則家無損減	財寶日滋長	如海吞衆流

善生經 (中阿含)

惠施及愛言	常爲他行利	衆生等同利	名稱普遠至
此則攝持世	猶如御車人	若無攝持者	母不因其子
得供養恭敬	父因子亦然	若有此法攝	故得大福祐
照遠猶日光	速利翻捷疾	不羸說聰明	如是得名稱
定獲無功高	速利翻捷疾	成就信尸賴	如是得名稱
常起不懶惰	喜施人飲食	將去調御正	如是得名稱
親友臣同恤	愛樂有齊限	謂攝在親中	殊妙如師子
初當學技術	於後求財物	後求財物已	分別作四分
一分作飲食	一分作田業	一分舉藏置	急時赴所須
耕作商人給	一分出息利	第五爲取婦	第六作屋宅
家若具六事	不增快得樂	彼必饒錢財	如海中水流
彼如是求財	猶如蜂採花	長夜求錢財	當自受快樂
出財莫令遠	亦勿令普漫	不可以財與	兇暴及豪強
東方爲父母	南方爲師尊	西方爲妻子	北方爲奴婢
下方親友臣	上沙門梵志	願禮此諸方	二俱得大稱
禮此諸方已	施主得生天		